＜籠神社と眞名井神社＞

これまでに幾度となく、籠神社と眞名井神社が登場した。それほど重要だということだが、＜スミルノフ物理学＞や＜瀬織津姫と菊理姫－シリウス系と太陽系＞によって、宇宙の真理まで体現していることが判った。

そこで、籠神社と眞名井神社について、改めてまとめることとする。大部分は既存の記事と重複するが、2017 年に第 82 代宮司が総まとめとしての著書を出版されたので、その内容など、新たに追記する。なお、第 82 代宮司との生々しい対談内容などについては、当ブログ＜宇宙維新－黄金の夜明け背景資料（後編）＞に示されている各記事を参照願いたい。

籠神社

眞名井神社

https://ja.wikipedia.org/wiki/%E7%B1%A0%E7%A5%9E%E7%A4%BE

(1)一般的な由緒等

籠神社自体の一般的な由緒等については、下記参照のこと。ここでは、概要を記すに留める。

http://www.motoise.jp/about/#02

①祭神、摂社、末社、奥宮

・本殿主祭神：彦火明命（ヒコホアカリノミコト）
・本殿相殿の神：豊受大神、天照大神、海神（ワダツミノカミ＝ヒコホホデミノミコトの后神のトヨタマヒメ）、天水分神（アメノミクマリノカミ）。
・境内摂社：恵美須神社、天照大神和魂社、眞名井稲荷神社。
・境内末社：春日大明神社（古代は武甕槌社）、猿田彦神社。
・奥宮：眞名井神社。

②由緒

神代の時代からニニギノミコトの兄神で、海部家の祖神であるヒコホアカリノミコトが、現在の眞名井神社の境内地で豊受大神を祭祀。第 10 代・崇神天皇の御代に天照大神が倭の笠縫邑から遷座し、天照大神と豊受大神を吉佐宮という宮号で 4 年間祀った後、天照大神は第 11 代・垂仁天皇の御代に、天皇の皇女で海部家の血を引く倭姫命により、豊受大神は第 21 代・雄略天皇の御代にそれぞれ伊勢に遷座。

その後、海部家26代目当主の海部直伍百道祝(アマベノアタエイホジハフリ)が宮号を籠宮（このみや）と改め、27 代目当主の海部直愛志（アマベノアタエエシ）が、奈良時代の 719 年に現在の籠神社の地へと遷宮し、それを契機に主祭神をヒコホアカリノミコトとし、相殿に豊受大神、天照大神、海神、天水分神を合祀。

旧吉佐宮は眞名井社（まないのやしろ）と名付けられた。眞名井社の境内に湧き出ている霊水は「天の眞名井の水」と言われ、海部家の 3 代目の天村雲命（アメノムラクモノミコト）が高天原にある天の眞名井という井戸の水を琥珀の鉢に盛り、眞名井原の泉に持ち下り、遷した水であると伝えられている。そして、眞名井原の藤岡山（眞名井神社が鎮座する山）にある磐座の傍らに湧き出る天の眞名井の水を、伊勢の藤岡山の麓にある外宮の上御井（かみのみい）神社の井戸に遷されたと伝えられている。

(2)眞名井の意味

眞名井の意味については＜現代の社会問題と唯識＞＜信長の首と伊雑宮＞＜葵祭＞＜伊雑宮御田植祭＞＜新嘗祭、神嘗祭、古伝新嘗祭＞＜星の信仰－太陽信仰の本質＞＜空海＞＜スミルノフ物理学＞＜瀬織津姫と菊理姫－シリウス系と太陽系＞で述べられているが、ここでスミルノフ物理学から導かれる宇宙観と併せてまとめる。

①スミルノフ物理学から導かれる宇宙観

宇宙は始原、無限と言える大きさの負のエネルギーの意識体だった。(負のエネルギーの世界とは、負の透磁率、負の誘電率の世界である。）これを起源意識と言い、神としては創造主や天御中主神と言われる。それが黄金比フラクタル分割収縮し、正の世界（正のエネルギー、正の透磁率、正の誘電率の世界）である三次元宇宙が誕生した。そこから更に黄金比フラクタル分割収縮し、星、原子、生命体が発生した。すなわち、宇宙は秩序を形成し、進化が義務付けられているエントロピー減少の意識的生命体としての世界である。

三次元宇宙はクラインの壺、メビウスの帯構造のねじれた複素空間で、エーテル繊維（エネルギー）で満たされている。エーテル繊維は負の性質を有するＳ極磁気系と、正の性質を有する N 極電気系で構成され、それぞれ S 極磁気単極子、N 極磁気単極子を形成し、これら磁気単極子が物質の根源＝素粒子の基となっている。そして、メビウスの帯構造の裏表は正負の世界が向かい合わせとなっており、鏡像体やカバラに於ける「合わせ鏡」の基となっている。

全宇宙は S 極系エーテル繊維が対数螺旋構造を成して繋がっており、起源意識から三次元宇宙へは、負のエネルギーが S 極系エーテル繊維を通じて供給され、生命エネルギーの本質となっている。このエネルギーを俗に“龍”あるいは“龍のエネルギー”と言う。宇宙のメビウスの帯構造は位相数学的に四面体と同義であり、四面体によって宇宙を埋め尽くすことができるので、四面体構造を有する物質、例えば水やシリカなどは、負のエネルギー＝龍のエネルギーの良い媒体である。

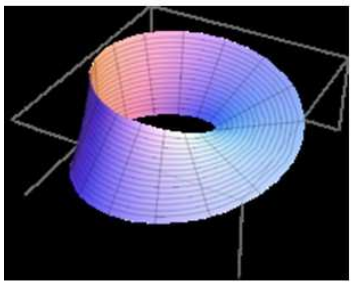
そして、すべての星や原子の中枢にはＳ極磁気単極子が存在し、宇宙を貫くＳ

極系エーテル繊維に繋がっており、万有引力の基となっている。これに対して、N 極系エーテル繊維は宇宙空間にバラバラに存在するが、各エーテル繊維は宇宙全体を通して網の目のように存在する。

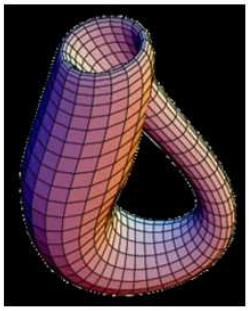
現在の宇宙は比較的初期の段階にあり、太陽系近辺の黄金比フラクタル分割回数は 137 回で、原子の微細構造定数の逆数として表れている。

太陽系は、元シリウスと言える巨大な恒星が黄金比フラクタル分割した結果、誕生した。元シリウスからはシリウス系恒星（シリウス A、C）と太陽（と近辺に存在する恒星群）が誕生し、元シリウスは現在、シリウス B と呼ばれる白色矮星となった。だから、シリウス B は太陽系にとっての、もう一つの起源意識とも言うべき存在である。また、白色矮星は高密度の重い天体だが、重力は S 極系エーテル繊維が集中している状態であるため、白色矮星は起源意識との繋がりが強く、シリウスー太陽系にとってエネルギー的にも、もう一つの起源意識とも言うべき存在である。そして、シリウス系の各恒星と太陽から更に惑星が誕生し、シリウス C からはアヌンナキの星ニビルが、太陽からは地球が誕生した。

メビウスの帯

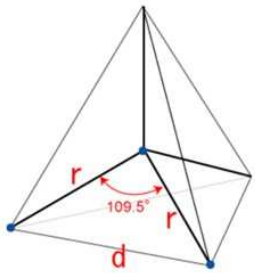


クラインの壺



Wikipedia

四面体

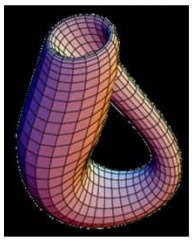


http://chemieaula.web.fc2.com/lecture/cos.html

②眞名井の宇宙観

眞名井の“眞”の字は、人が首を下向きにしている状態を象ったもので、“顛（てん：逆さま）”の原字である。つまり、我々が本質だと思っている物質宇宙は、実は本質＝主体（＝エネルギー体）である起源意識が客体（＝物質）となった状態であり、起源意識の中に浮かんで、主体である起源意識を直接を認識できないが、その負のエネルギーが噴出してくる井戸のような状態のクラインの壺、メビウスの帯構造である。それは、水や酒（メビウスの帯構造と同位相＝縮図である四面体構造を有する故に負のエネルギーを媒介できる物質）を入れるヒョウタンとしても喩えられ、眞名井神社の別名の 1 つが、ヒョウタンを意味する匏（ひさご）を冠した匏宮（よさのみや）であるのは、極めて暗示的である。また、匏宮は与謝宮とも書くが、“与謝”はシリウスの和名の 1 つ“与謝星”に由来し、それは夜空に明るく輝く夜の太陽とも言うべきシリウス A だけではなく、本質は、肉眼では見えない、起源意識に重なるシリウス B である。

クラインの壺



Wikipedia

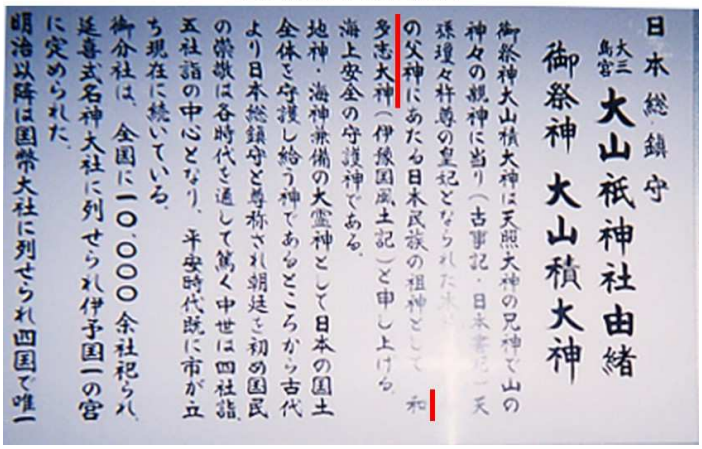
ヒョウタン

http://blog.rustle.info/archives/274

宇宙の歴史からすると、起源意識自身が、自らが何なのかを知るために、自らのエネルギーの分化である生命体とその活動の場（器）となる宇宙を創成した。それにより、エネルギーの塊の状態ではできなかった、“感覚”というものを通して感じ、様々なことを認識・経験し、進化できるようになった。古生代には海洋で生命種が爆発し、陸上へ進出する直前の段階で絶滅。その後、中生代には両生類が陸上に上がって爬虫類へと進化して巨大化したものの、変温動物では気候変動などに対応できず絶滅。そして、新生代に至り、恒温型で感覚器と思考する頭脳を携えた人類誕生となった。つまり、段階を経て、生命種が進化の頂点に達しては絶滅し、次の新たな生命種が登場し、ということを繰り返してきたわけだが、これは黄金比フラクタル分割と相似で、エントロピー減少の進化系である。

また、起源意識のエネルギー的分化は、次々に神々が誕生したことの真意である。だから、あらゆるものには神が宿っており、神の分化＝部分であって、かつ、神を構成する全体でもある。つまり、生命体は起源意識の一部であり、かつ、起源意識の全体を構成する。各生命体の意志を“志”とするならば、多くの“志”が和している状態が、この宇宙である。これを“和多志（わたし）”と称し、日本語に於ける一人称“わたし”の語源だが、日本総鎮守とされる愛媛県の大山祇（おおやまつみ）神社では、大山積大神（オオヤマツミノオオカミ）を日本民族の祖神として“和多志大神”と称し祀っている。

大山祇神社の由緒書



日本総鎮守
大三島宮 大山祇神社由緒
御祭神 大山積大神

御祭神大山積大神は天照大神の兄神で山の神々の親神に当り（古事記・日本書紀）天孫瓊々杵尊の皇妃となられた木花
の父神にあたる日本民族の祖神として 和
多志大神（伊豫国風土記）と申し上げる。
海上安全の守護神である。
地神・海神兼備の大霊神として日本の国土全体を守護し給う神であるところから古代より日本総鎮守と尊称され朝廷を初め国民の崇敬は各時代を通して篤く中世は四社詣五社詣の中心となり、平安時代既に市が立ち現在に続いている。
御分社は、全国に一〇、〇〇〇余社祀られ延喜式名神大社に列せられ伊予国一の宮に定められた。
明治以降は国幣大社に列せられ四国で唯一

さて、生命体が物質を認識したり、自らと他を区別するためには、名が必要となった。（人＝ヒト＝霊人としての自己の誕生。）それは単に、識別のためだけのものだった。しかし、人類型の生命体が誕生してから、「あなたとわたし」という単なる識別に、「あなたの物と私の物」という所有の概念＝我（が）が芽生え、それがいつしか膨らんで「アレが欲しい、コレが欲しい」という欲望が発生した。これがエゴ＝自我である。エゴがエゴを呼び、その所有欲は他者から奪う行為を発生させ、そこから憎しみが生まれて戦争が起こり、遂には、自らが起源意識の分身（＝己、巳、巳）であることを忘れてしまった。これはとりわけ、太陽系最外の惑星でシリウス系の惑星ニビルの住人アヌンナキが、ニビルの大気を修復するための金を採掘するために地球に降臨し、アフリカに居た猿人の遺伝子を操作して彼らに代わる採掘労働者としての人類を誕生させ、人類に対して“神”として振る舞い、人類が神を自らの外に求めることによって促進された。それにより、人類はエゴを膨張させてしまったのである。

換言すれば、人類はエゴという鎧でガチガチに固められてしまったことに因り、本来の性質（本質）が解らなくなってしまったのである。だから今に至るまで、人類型生命体の歴史は、その繰り返しである。その原因は、“名”に所有欲＝エゴが付随したことに尽きる。このような宇宙の状態を表したのが“眞名井”に他ならず、名の真相は宇宙の真理そのものである。

アヌンナキは猿人を遺伝子操作して人類を創り上げ、自らを人類に対する“神”として振る舞うことにより、いつの間にか人類に大きなくびき（カルマ）を負わせたが、むしろ、エゴを解消するという全宇宙的な宿命により、地球と人類を学びの場とさせられた、とでも言うべきか？だから、地球＝知球＝知宮と命名されている。他の言語では、決してこの真理は解らない。

③自己と自我

前項では所有の概念＝我（が）や、起源意識の分身（＝己、巳、巳）という言葉が登場した。これらについて、もう少し詳しく考察しよう。漢字の意味は、主に以下参照。

https://kanji.jitenon.jp/kanjie/

a：我

我は鋸刃のついた刃物もしくは鋸状の歯の付いた戈（ほこ）の象形。これを「われ」と読んで一人称とするのは、殺傷能力のある武器を手にして自分を護る、あるいは、武器を手に相手の物を奪うことを意味する。

b：私

同じく一人称として使われるが、「禾（のぎへん）」は稲や粟など穀物の意味、「ム（む）」は自分個人を意味する。つまり、稲を持つ個人のことで、我もそうだが、所有の意味が含まれる。

縄文時代の遺跡からは争いの形跡は発見されていないが、稲作が本格的に始まった弥生時代の遺跡からは争いの形跡が発見されているのは、稲を蓄えて所

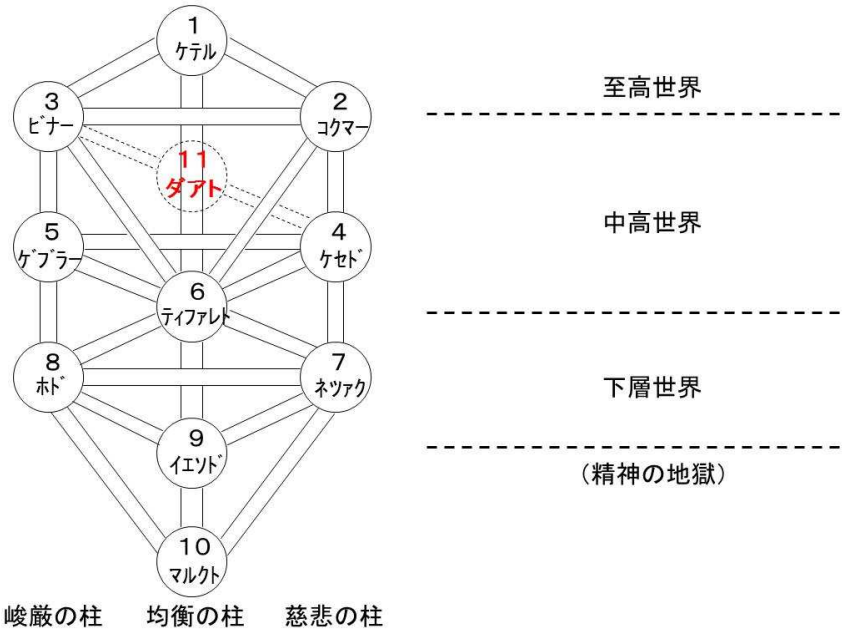
有する概念が発達したためである。

c：巳、已、己
　いずれも唯一始原の起源意識の象形。シンボルで表せば一つ巴や勾玉。一つ巴＝起源意識＝天御中主神から物質（プラスとマイナス、陰陽）が分化して（二つ巴）、生命体が誕生した。生命体の進化と共に起源意識も進化し（三つ巴）、生命体が真理（＝宇宙と生命体存在の意義）を悟って起源意識と一体化した状態になれば、起源意識自身が更なる高みへと進化する段階となる。（四つ巴＝花菱＝一つ巴が螺旋上昇した状態。）

一つ巴　二つ巴　三つ巴　神宮の花菱

http://kamondb.com/kika/tomoe.html

　しかし、三つ巴の状態は、上昇する螺旋でもあるが、下降する螺旋にも成りえ、下降は退化であり、「生命の樹」を下降して精神の地獄＝ケリポットに堕ち、その生命体もしくはその生命体が存在する宇宙が存在しえなくなることを意味する。何故なら、宇宙はエントロピー減少の進化系で、進化が義務付けられており、それに反する存在は必ず破壊されるのが宇宙の物理法則だからである。（仮にエゴにより栄華を極めた一族が何代か繁栄したとしても、宇宙の歴史から見れば一瞬に過ぎず、必ず消え去る運命にある。）



エゴが膨張すれば、下降が上昇を上回る。エゴとは、穢れでもある。その穢れを祓う神々こそ、神道の大祓祝詞に記載されている祓戸四神（瀬織津姫、速開都比賣（ハヤアキツヒメ）、気吹戸主（イブキドヌシ）、速佐須良比賣（ハヤサスラヒメ））であり、四柱の神々で花菱＝神の戦車メルカバーを形成する。すなわち、祓の神々を意識することに依ってエゴを取り去り、あるべき姿に戻るということである。その祓の先導役が瀬織津姫（＝シリウスB）である。

花菱は一つ巴の螺旋上昇した状態だが、平面的には一つ巴と同義である。つまり、瀬織津姫の祓により、人類はあるべき姿に戻り、宇宙＝起源意識が更なる高みへと進化する。

また、四柱の神々＝花菱は、日本に於ける節分発祥とされる吉田神社の追儺式(ついなしき)でも暗示されている。（詳細は＜節分＞参照。）

方相氏

http://www.linkclub.or.jp/~uno/A604yt-yoshidatsuina.htm

http://kotohurari.web.fc2.com/event/02yosi01.html

この追儺式では、怒り、悲しみ、苦しみを表す赤、青、黄の鬼が表の鳥居から境内に乱入するが、続いて大舎人（おおとねり）が黄金 4 つ目の仮面を被って玄衣朱裳（げんいしゅしょう）を着装し、盾と矛を持って方相氏（ほうそうし）となり、侲子（しんし）という小童を多数従えて来る。陰陽師が祭文を奏し終わると方相氏が大声を発し、矛で盾を 3 度打ち、群臣呼応して鬼を追い、舞殿を巡る。最後に、上卿（しょうけい）以下 3 人の殿上人が桃弓で葦矢を 3 回放ち、疫鬼を追い払う。

鬼の色は色の三原色で、混合すると黒になるから、まさに暗黒の邪気の象徴である。

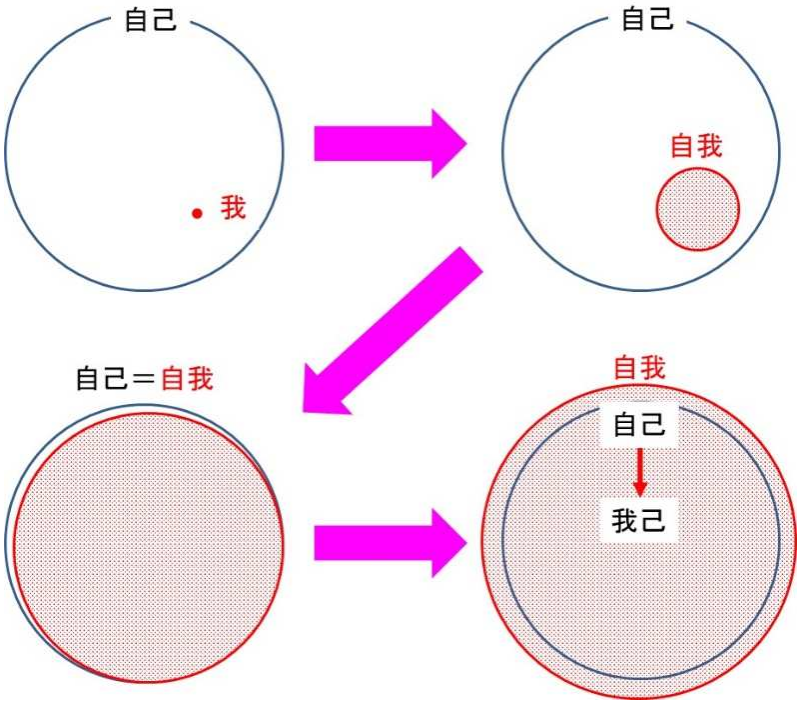
鬼を追う方相氏は支那由来だが、黄金はニビルとアヌンナキの象徴で、太陽が黄金の輝きに喩えられるように、光としての象徴でもある。だから、邪気である暗黒の鬼を光が追い祓うということであり、闇が去って光の世界へと至ることの暗示である。そうなると、単なる光ではなく、救世主の光であり、究極

的には起源意識の大元の光ということである。だから、4 つ目＝花菱である。
　最後に 3 人が 3 回矢を放つのは、「生命の樹」の三神三界（3×3＝9）を暗示し、密教に於いて魔を退散させるとされる九字切りでもある。桃は邪気を祓うとされるが、「兆しの木」であり、それはイナンナを原型とする「死んだはずの者が蘇った、復活の兆しの木」であって「生命の樹」である。
　葦は葦原中国＝シュメールの暗示であり、弓は射手座が割り当てられている軍神ニヌルタの暗示である。

　閑話休題。巳（み）は龍神の分身の蛇である。ニビルには存在せず、地球のみ存在する蛇は DNA 二重螺旋のシンボル化であり、S 極系エーテル繊維及び起源意識（の負のエネルギー）のシンボル化だが、漢字としての意味は起源意識。
　己（おのれ）は起源意識のエネルギーが肉体に入った状態で、名が付いて自己となる。
　已（のみ）は自己と起源意識の中間状態だから、S 極系エーテル繊維。
　“忌中”とは、近親者の喪に服し忌み慎んでいる期間のことだが、“忌”は“己の心”である。物質宇宙は主体ではなく客体だから、これは肉体という仮の姿を抜け出して元の己＝起源意識と一体化することを意味する。“心”もまた、一つ巴が 4 つ合わさった象形であり、すなわち、起源意識である。だから、亡くなった日を“命日＝本来の命を授かった日”と言い、本来の命とは、起源意識であることを意味する。これを裏付けるかの如く、誕生の“誕”は“ウソ、偽り、欺く”という意味で、誕生とは“己の本質を偽って生まれてくる”という意味である。

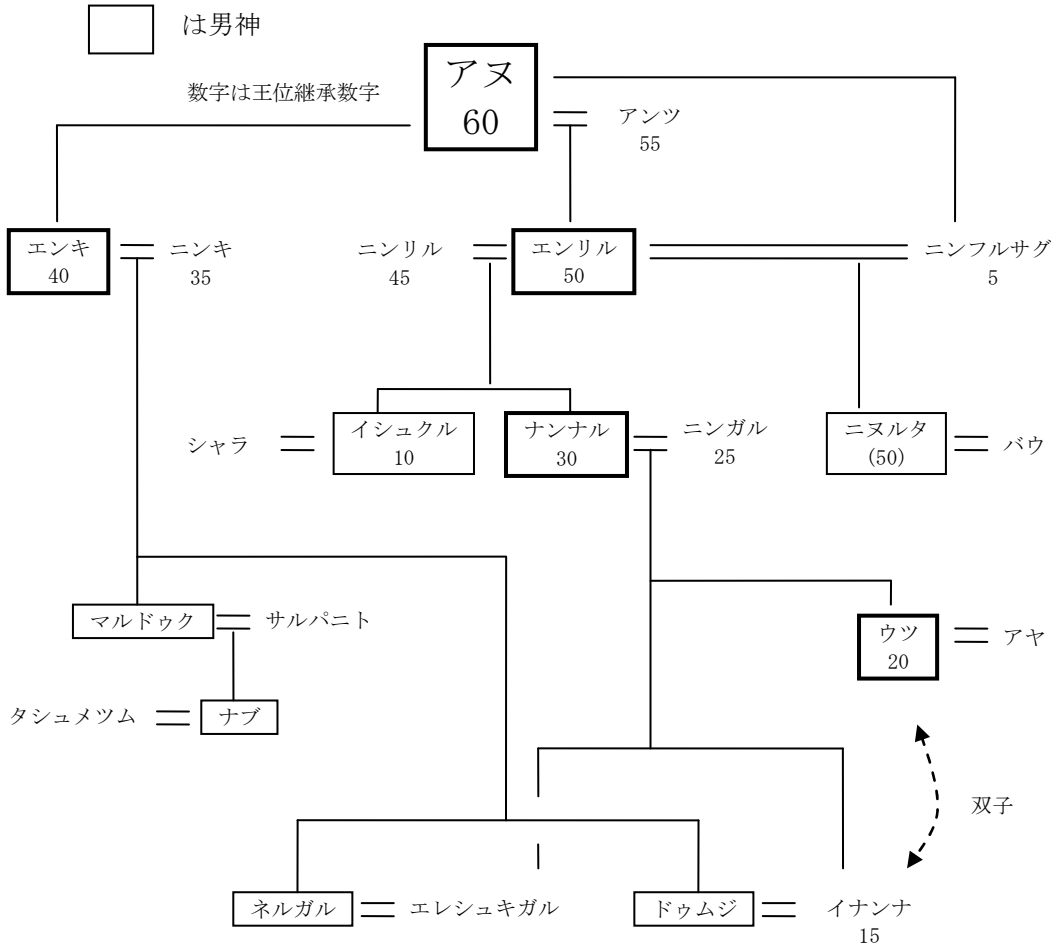
d：自己と自我（エゴ）
　このように巳、已、己の意味が分かったところで、自己と自我の関係を見てみよう。
　無垢で生まれ、名が付けられた自己の中に、所有の概念＝我が芽生えて自我＝エゴとなる。この自我は一般的に成長と共に次第に大きくなるが、まともな人間は、自己と自我のバランスを取る。自我は、他者に負けたくない、他者よりも上位の状態（裕福、地位が高い、名誉があるなど）にありたい、という意識を生み、文明が発展してきた原動力でもあり、一概に否定できるものではない。自我が発生することもまた、この宇宙の法則である。自我は自己防御反応でもあるので、人体を護る防具と見なしても良い。
　それが大きくなると、全身を覆う鎧となる。この時点が自己＝自我となった状態で、自己が完全なエゴと化す。
　そして、自我が自己を飲み込むとエゴの固まりとなり、エゴという鎧でガチガチに固められた状態で、本来の自己とは全く異なる存在となる。我の中に己が隠された状態なので、この状態を“我己（がこ）”とでも言おう。自己が我己に変質してしまった状態である。
　現在の世界では、創造主＝起源意識の御心から乖離した多くの我己が存在するので、争いが絶えること無く、人が物のように扱われ、命が粗末にされ、詰まるところ、カネという妄想によってすべてが支配されている。カネは日本語

で金と書くが、これは元素の金（きん）と同じで、かつてカネの裏付けはキンであり、物々交換の代償で、悪い存在ではなかった。それがいつしか、カネが人生の目的のすべてとなってしまったのである。



貨幣経済の元はバビロンである。バビロンは古代核戦争後、マルドゥクが最高神となった。マルドゥクはエンキの長子で、事あるごとにその正統性と権利を主張したが、ニビルの血の掟により、王位継承権はエンキの異母弟のエンリル系にあったので、常に不服に思っていた。いつしかマルドゥクは最高権力を主張するようになり、それが原因でアヌンナキの間で諍いが起こり、ついにはシュメールからエジプト、インダスに掛けて古代核戦争となった。つまり、マルドゥクのエゴが古代核戦争まで引き起こしてしまったのである。（＜神々の真相 1＞）

マルドゥクはエジプトの最高神ラーだったが、バビロンの最高神となって以降、バビロンにはマモン・ラーというサタンが登場した。これは地獄の 4 人のサタンの 1 人で、富＝カネの神であり、この名が“マネー”の語源である。ラーを冠する以上、マルドゥクが原型であることは明白である。（＜神々の真相 4＞）だから、聖書では事あるごとにバビロンが非難される。人類はアヌンナキに遺伝子操作されてアヌンナキのカルマを背負わされ、核戦争という代償まで背負わされたのである。そして、マルドゥク流の貨幣経済をベースとしたカネがすべての世の中となり、そのくびきから逃れられないでいる。



e：エゴの解消

では、どうすればそのような状態から脱することができるのか？答えは簡単である。名に付随したエゴという鎧を脱ぎ去れば良いだけである。行き過ぎたエゴを解消すれば良いだけである。

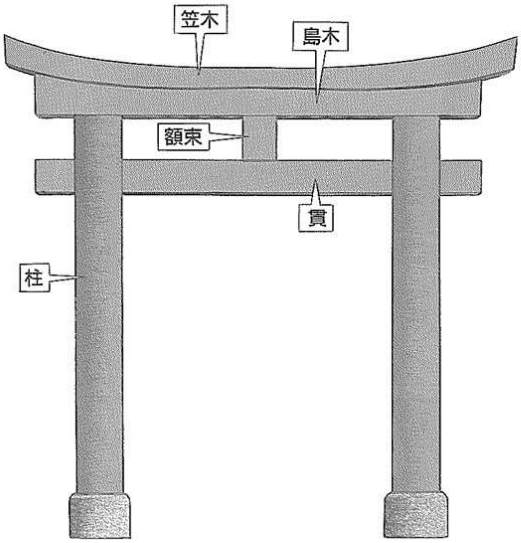
日本語に於いて、「我々」とか「私」という一人称が省かれることが多いのは、無用な争いを避けるためである。インド・ヨーロッパ語族では一人称を最初に発声するので（発声しなくとも動詞で主格が分かる）、争いは絶えない。だから、一人称を書く必要が生じたときには“我、私”ではなく、“わたし、和多志”としよう。あるいは、奇跡によって人に幸を与え、知識・学問等も表す奇魂（くしみたま）の意味を込めれば“わたくし”となる。

名にエゴが付随しないようにするため、エゴになりやすい現代西洋文明の根幹となっている聖書に於いては神の名は無く、敢えて“ありてあるもの”とされている。敢えて名を示さないのは、その“名”にすがったり、その“名”を利用した覇権争いにならないようにするためである。だから、“神の名のもと”

に戦うことは、正当化され得ない。その場合の“神の名”とは、アヌンナキの名に他ならないからである。アヌンナキという神々の名のもと、自らの主張＝権利を正当化するため、人類は戦いを繰り返してきたのである。

日本に於いては、八百万の神々の名は多彩だが、実は最高神の名は無い。それは、すべての神社の本宗と仰がれる神宮の鳥居で示されている。神明（しんめい）鳥居である。鳥居は一般的に図に示すような形態で、額束（がくづか）には神社名やその神社の位階等が記載されている。神社名やその位階は祀られる神を意味するので、神の名と同義である。しかし、神明鳥居には額束が無い。すなわち、“神明＝しんめい＝神名”と称しながら神の名が無く、名の無い神なのである。代わりに、特に内宮宇治橋前の鳥居では、冬至の朝日が鳥居の中心から昇り、“永遠の常若たる光の神”であることを暗示している。敢えて太陽神的な“天照大神”の名を掲げていないところがミソである。

一般的な鳥居



飛鳥昭雄、三神たける共著、学研ムーブックス

神宮の神明鳥居

http://blogs.yahoo.co.jp/yoshimizushrine/59300580.html

http://iseshima.keizai.biz/headline/photo/608/

また、鳥居の起源について、天照大神が天の岩戸に隠れた際、八百万の神々が鶏を鳴かせたが、この時に鶏が止まった木（トリが居る木）を鳥居の起源であるとする説を神社本庁がホームページで紹介している。その鶏は、古事記では“常世の長鳴鳥”とされている。“長鳴鳥＝ながなきとり＝名が無き鳥”で、これもまた“名が無い”ことを暗示しているのである。

つまり、日本の信仰の本質は自然信仰であって、自然を通じて“名が無き”根源神へ祈ることである。根源神は、アヌンナキのような人物的神ではない故に。

祈りとは意識だが、意識＝S 極系磁気単極子は負のエネルギー故に光速を超えて伝播するので、思い描いたことが現実化する。特に、負の世界である向こう側の世界では顕著で、臨死体験を例とすると、仏教徒は三途の川を見るが、クリスチャンは花畑や天使などを見るとされる。しかし、日本人以外のクリスチャンが三途の川を見た例が無いのは、生前の記憶や教えが死後の世界を形成することを意味している。天国や地獄、などということではなく、輪廻転生する場合は地球内部の負の世界へ、そうでない場合は創造主＝起源意識のもとへ生命エネルギーは還るのである。

宇宙創造の歴史を振り返ると、原初は圧倒的な光のみだったから、サタンなどは存在しなかった。しかし、アヌンナキの物語の誤解・曲解や、アヌンナキと人間のエゴの意識が作り出した想念のエネルギーにより、創造されてしまった。以後、人類はそれに憑りつかれ、成すがままにされているとでも言うべきだろう。

それを解消するために、人類のエゴ＝贖罪を背負って十字架に掛けられた地球の主エンキの息子イエス・キリスト。その後、シュメールの末裔＝イスラエルの十支族の末裔の居る日本が原爆を投下され、古代シュメールの核戦争が古代シュメールの末裔の居る国で再現されてしまった。またもや人類はカルマを背負ったかと思いきや、イエスが人として贖罪を背負った如く、日本が国として贖罪を背負ったのである。何故なら、日本は原始キリスト教徒＝秦氏（中核は二支族）の居るイエスの国でもあり、それは前述の神宮の御神紋に刻まれている十字（架）で堂々と暗示されている。

そして、1986 年のチェルノブイリ原発事故、2011 年の福島原発事故もまた、核兵器の爆発と同義である。これらのカルマの解消は、果たして、地球規模の大災害によるのか、特異な国日本が背負うことになるのか？いや、全人類が、行き過ぎたエゴを捨て去るべきなのである。

もし、エゴを完全に無くす、あるいは昇華することができたら…すべてのものは創造主からの借り物という認識となり、誰もが自分のために所有することは無くなり、すべては共有物となる。何と言っても、體（からだ）自体、創造主からの借り物なのだから、この世での用が済めば脱ぎ去って、創造主のもとに還るだけである。このような認識は、各地で共同体が有機的に作用し、所有で争いが発生することが無かった縄文時代には成されていたのである。そして、“宵越しの金は持たない”江戸の長屋文化に於いても。これらを紐解く鍵として、眞名井は大切に保持されてきたのである。

(3) 籠神社

①籠神社の意味

＜スミルノフ物理学＞に詳しくまとめられている。眞名井の宇宙観では、物質世界は主体の創造エネルギーである起源意識が客体的な物質エネルギーに転換した状態で、起源意識の中に浮かび、主体を直接認識できないが、そのエネルギーが噴出してくる井戸のような状態である。そして、物質世界では“名”

によって、各々が識別されている。すなわち、構造として、スミルノフ物理学から導かれる宇宙論と極めて類似している。

ならば、S 極系エーテル繊維は母なる起源意識と物質や生命体を結ぶ臍の緒のような存在であり、S 極系エーテル繊維を辿れば起源意識に繋がれるということである。神道に於いて、あらゆるものに神聖を見出す背景には、このような理由があったのである。

そして、精神世界で言うところの“繋がる”とか“アクセスする”ことは、生命体に内在する S 極磁気単極子（クンダリーニ、生命エネルギー、ソマチッド）から S 極系エーテル繊維を通じてのアクセスと解釈できる。いわば、S 極系エーテル繊維を通じての共鳴であり、これがしばしば“波動の共鳴”とも言われる。この対数螺旋構造を成す S 極系エーテル繊維の流れ（エネルギー）を、その姿から東洋では太古から“龍”と呼んできたのであり、“龍”は現実世界の“蛇”となって、「生命の樹」に 3 回転半で絡みつく。だから、根源神は龍の姿とされることが多く、その姿は注連縄としても象徴されている。

そして、眞名井神社を祀る籠神社は竹冠に“龍”と書く。“竹”は篆書（てんしょ）体は以下のように書くが、これは 3 本柱の「生命の樹」と「知恵の樹」の「合わせ鏡」となっている象形で、「完全さ＝宇宙そのもの」の暗示であると同時に、宇宙が「合わせ鏡」のメビウス構造であることの暗示でもあり、上（＝起源意識）からエネルギーが降下（分化）することを暗示している。そこに、宇宙を貫く S 極系エーテル繊維＝龍の存在を示したのが“籠”である。つまり、“籠”は宇宙の姿を具現化しているのである。

https://search.yahoo.co.jp/image/search?rkf=2&ei=UTF-8&p=%E9%9B%B2%E9%BE%8D%E5%9B%B3

竹の篆書体

http://jigen.net/kanji/31481

眞名井神社を奥宮として祀る籠神社は“コ（の）じんじゃ”と読む。生命体は宇宙根源の“氣（キ）”を食物から取り入れるが、神に捧げる食物を“ミケ”と言って“御食”あるいは“御饌”と書き、“御”は丁寧語だから“氣”が転じて“ケ＝食、饌”となる。そして、これらカ行の言葉ですべてが丸く収まる“オ”の形の発音に転化すれば“コ”となる。その“コ”という音（おん）に、宇宙の姿を具現化した“籠”という漢字を当てたのである。

すなわち、“籠神社”とは“宇宙根源の氣を取り入れて丸く収まる神の社”という意味であり、宇宙の真理を表す“眞名井”と実に良く呼応している。ちな

みに、シュメール語で地球は“キ”だから、地球も宇宙根源の“氣”と S 極系エーテル繊維で繋がっていることを暗示する。

②祀られる神の真相

重要なのは元伊勢＝本伊勢たる神の豊受大神と天照大神で、両神は“二神一座、一神二座”であること、そして極秘伝にある“豊受大神　亦名　天御中主神　亦名　天照大神”で豊受大神が水気根源とされること、同じく極秘伝の“天照大神の荒御魂は豊受大神の和御魂、豊受大神の荒御魂は天照大神の和御魂”、そして、本殿で祀られる主神の彦火明命について、彦火明命の荒御魂は瀬織津姫とも言われており、彦火明命の正式名が天照国照彦火明櫛玉饒速日命（アマテルクニテル・ヒコホアカリ・クシタマ・ニギハヤヒノミコト）とされることである。

a：天御中主神、天照大神、豊受大神

天御中主神は創造主であり、大元の意識エネルギーである起源意識。その光の側面（陽の側面）が天照大神で、負のエネルギーの側面（陰の側面）が豊受大神である。これが“二神一座、一神二座”“豊受大神　亦名　天御中主神　亦名　天照大神”の真意である。この陰陽の合一をシンボル化したものが、天からのエネルギーと地からのエネルギーが合わさっている六芒星だが、この六芒星は太陽神ウツのシンボルでもあり、亀もシンボルの 1 つとする地球の主エンキのシンボルでもある。

また、宇宙のメビウスの帯構造の裏表は正負の世界が向かい合わせとなっており、鏡像体やカバラに於ける「合わせ鏡」の基となり、“天照大神の荒御魂は豊受大神の和御魂、豊受大神の荒御魂は天照大神の和御魂”となる。

起源意識はすべてが光だから遍く照らし、そこに存在するものには蔭（かげ）ができない。これを“お蔭様”と言い、神としては近江の三上神社などで祀られている天御蔭神（アメノミカゲノカミ）でもあるが、“三上”は“三神”に通じ、三神とは天御中主神、天照大神、豊受大神である。アヌンナキで言えば、最高神のアヌである。また、母なる源という点では、人類の母とも言えるニンフルサグ（エンキの異母妹）でもある。

天照大神の本質は光であり、光り輝く太陽や、夜空に光り輝くシリウスもまた、天照大神である。アヌンナキで言えば、太陽神ウツや羽毛の生えた光り輝く蛇神ケツァルコアトル＝ニンギシュジッダである。ただし、夜は陽の昼に対して陰だから、昼間の太陽神が男神ならば、夜の太陽神は女神となり、あるいは、夜は闇で見えないから、冥界の神となる。太陽女神の原型はウツと双子のイナンナであり、冥界の神の原型はエジプトで冥界の神とされた地球の主エンキとその息子のネルガル、そして、下の方の世界＝冥界に婚約者ドゥムジの亡骸を取りに行って木に掛けられて瀕死の状態となり、エンキの使者が持ってきた「生命の水」によって蘇ったイナンナである。

豊受大神の性質である負のエネルギーの世界とは、負の透磁率、負の誘電率

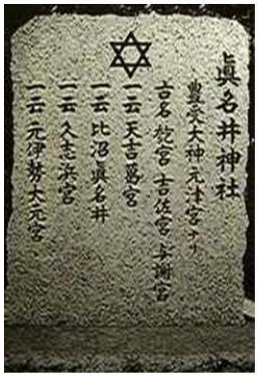
の世界であり、エネルギー的に負のエネルギーの性質の強い部分は豊受大神となる。負の世界の起源意識から三次元（正確には四次元のクラインの壺）の物質宇宙に対数螺旋構造を成す S 極系エーテル繊維が出ており、負のエネルギーが S 極系エーテル繊維を通じて供給され、星や物質、生命の源となっており、すべての星や原子の中枢には S 極磁気単極子が存在し、宇宙を貫く S 極系エーテル繊維に繋がっている。このエネルギーが“龍”あるいは“龍のエネルギー”である。故に、豊受大神は根源神的であり、すべての龍神の根源でもある。そして、物質宇宙のあらゆるエネルギーの元だから、“豊かな氣”が転じて“豊氣（トヨケ）＝トヨケ”となり、これが“豊受”とされた。

また、宇宙のメビウスの帯構造は位相数学的に四面体と同義であり、四面体によって宇宙を埋め尽くすことができるので、四面体構造を有する物質、例えば水などは、負のエネルギー＝龍のエネルギーの良い媒体である。そのため、豊受大神は水気根源の神とされる。

そして、陽の天照大神が太陽ならば、陰の豊受大神は夜空を照らす月でもあり、太陽が天空に輝く日であるのに対して、豊受大神は地上で輝く火の神でもあり、天の太陽に対する大地の神＝国常立神でもある。

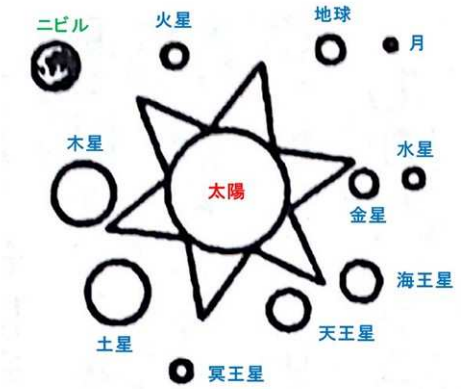
天照大神に当てはめられるのが太陽神ウツならば、その対で陰である豊受大神は大地の豊穣神で太陽女神のイナンナとなる。イナンナのシンボルはロゼッタで、日本では十六花弁八重表菊紋となり、六芒星と合わさって神武参剣道場などの石灯篭に刻まれている。（なお、2018 年 12 月には、神宮参道の石灯篭はすべて撤去された。）

眞名井神社



http://wave.ap.teacup.com/renaissancejapan/263.html

シュメールの粘土板に記された太陽系



「人類を創成した宇宙人」（ゼカリア・シッチン、徳間書店）

神武参剣道場

http://japantemple.com/2015/07/16/post-185/

b：彦火明命

正式名は天照国照彦火明櫛玉饒速日命（アマテルクニテル・ヒコホアカリ・クシタマ・ニギハヤヒノミコト）であり、四柱の神の合体である。（＜日本の真相 5＞）

・天照国照命

本来の天照大神。また、別の意味では“天を照らし国（大地）を照らす”神

だが、そのような神として思い浮かぶのは、（ヒコホアカリの弟である）ニニギノミコトが天孫降臨する際、天の八衢（やちまた）で高天原（＝天）から葦原中国（＝国、大地）までを照らしていた猿田彦大神である。この神は大神と言われるほど重要だが、原型は羽毛の生えた光り輝く蛇神ケツァルコアトル＝ニンギシュジッダである。（以下、＜神々の真相 1＞＜神々の真相 6＞。）

ニンギシュジッダはエンキの息子で天才科学者であり、エンキと共に人類創成に携わった蛇神（シンボルはカドゥケウスの杖）であり、世界中のピラミッドやストーン・ヘンジ（サークル）を設計し、エジプトでは知恵の神トートであり、その姿はトキであるともヒヒであるともされ、ヒヒは猿である。猿田彦大神は伊勢の阿邪訶（あざか）の海で漁をしていた時、比良夫貝（ひらふがい）に手を挟まれ溺れたが、これは海に関わる逸話であり、海神エンキとの深い繋がり（ニンギシュジッダはエンキの息子）を暗示している。

ある時、ニンギシュジッダは腹違いの兄であるマルドゥクと喧嘩になり、エンキの助言によってアフリカを去り、信奉者を連れて中南米に渡った。それが（明らかにアフリカ系である顔の像が発掘されている）オルメカ文明の起源であり、中南米各文明の楚となった。そして、ニンギシュジッダは日本を含めた環太平洋文明圏に於いて影の最高神として振る舞った。表の最高神は、中南米ではニンギシュジッダが考案した二十進法に暗示されているが如く、王位継承数字 20 を有する太陽神ウツである。

猿田彦大神は天の八衢でアメノウズメと出会い、結婚したが、アメノウズメの原型は、性的な奔放なイナンナである。イナンナの王位継承数字は 15 で、彼女と双子のウツは 20 だから、これはニビルに於ける夫婦の扱いでもある。つまり、猿田彦大神にウツが重ねられていることの暗示で証拠でもあり、ニンギシュジッダは隠れている。籠神社の境内では、末社の猿田彦神社で猿田彦大神も祀られている。

・彦火明命

古事記創作時点に於いて、本来の天照大神を隠す目的で創作された神で、天火明命とも。陽の太陽に対する、地上に於ける陰の火という対比。天孫降臨したニニギの兄とされるのは、謎を解くための鍵としての意味合いもある。

ニニギの兄という点では、兄に代わって地球の総督となり、地上の統治権を握ったエンリルをニニギと見なせば、ニニギの兄である彦火明命は海神エンキである。故に、籠神社は海神ゆかりの神社である。

・櫛玉命

奇魂（くしみたま）でもあり、そうすると「幸魂・奇魂・守給・幸給（さきみたま・くしみたま・まもりたまえ・さきはえたまえ）」と唱える出雲系の神、大物主神である。

出雲系は海部氏に入り婿した徐福系始皇帝の臣下の一団で、海部氏をトップとして物部氏となった。その中核は葛城氏で、海部氏の兄弟分家である尾張氏と共に、邪馬台国の纏向で祭祀を行っていた。元々の出雲とは、纏向遺跡を中心とした一帯の出雲荘付近のことである。（＜日本の真相 6＞。葛城氏は後に蘇

我氏となった。）
　原始キリスト教系の秦氏が渡来し始めていたある時、御神宝を管理していた出雲族の出雲振根（イズモノフルネ）が留守の間に、弟の飯入根（イイイリネ）が秦氏に御神宝を渡してしまった。帰って来た振根は怒り、弟を水浴びに誘い出し、斬り殺してしまった。この事件がきっかけとなり、最終的に海部氏の物部王権から秦氏へ王権が委譲されることとなり、大和朝廷成立となった。そのため、以後、大和政権によって出雲族の巨大な神殿が建てられ、丁重な弔いの祭祀となった。出雲の神（大物主神、大国主神）が何かにつけて祟る神とされているのは、このような史実に基づくからである。この事件は、日本書紀に記述されている。

“崇神天皇は出雲大神の宮に納められている神宝を確かめさせるため、武諸隅命（タケモロズミノミコト）を出雲に派遣した。神宝は出雲振根が管理していたが、丁度この時は筑紫に行っていたので、弟の飯入根が対応し、弟の甘美韓日狭（ウマシカラヒサ）と子の鸕濡渟（ウカヅクヌ）に神宝を持たせて献上してしまった。帰って来た振根は怒り、いつか弟を殺そうと考えた。振根は密かに刀とそっくりな木刀を作り、腰に掛け、水浴びに誘った。振根は先に上がり、弟の刀を身に付けると、弟は驚いて兄の木刀を取ったが、振根に切り殺されてしまった。”

　武諸隅命は海部氏の祖であり（＜日本の真相 5＞）、崇神天皇こと乎止與命（オトヨノミコト）は海部氏＝尾張氏に婿入りした葛城氏（＝徐福系）である（＜神の名を冠する天皇＞）ことは当然隠されているが、当時の事件を如実に表している。
　纏向からは元兵主神社（元桧原神社）を介して卑弥呼の邪馬台国の都介野岳を遥拝し、また、ダンノダイラから巻向山越に、トヨの大邪馬台国の新たな神山として選ばれた泊瀬山を遥拝した。邪馬台国の都介野岳を遥拝していたのは卑弥呼直系の海部氏であり、海部氏の本宗ではない伊理泥王の血統は、ダンノダイラから泊瀬（初瀬）山を遥拝していた出雲族である。
　ダンノダイラは秦氏に依る新たな神山・三輪山の傍にあり、丁重にお祭りしなければならない、何かにつけて祟る神を祀る場所としては、大邪馬台国からの祭祀の連続性を考えても妥当である。悲劇の主人公、伊理泥王は大和朝廷に於いて、大物主神として丁重に祀られるようになった。そして、その神祭りのために子孫の大田田根子が必要とされたことは、神祭りは特定の血統でなければならないということを示しているだけではなく、このような悲劇があったが故に、先祖供養をその子孫が行う必要が生じたためである。（＜日本の真相 7＞）

・饒速日命

十種神宝（とくさのかんだから）を携え、天磐船（あまのいわふね）に乗って河内国に降臨したとされる天孫で、長髄彦（ナガスネヒコ）が仕えていた神。神武は東征の際、ヤマト一帯を治めていた長髄彦の抵抗に手こずるが、神武が持つ天孫の印である天羽々矢（あめのはばや）と歩靫（かちゆき）をニギハヤヒが見て、抵抗するナガスネヒコを殺し、神武に帰順した。

ニギハヤヒはナガスネヒコの妹、トミヤスヒメ（日本書紀では三炊屋媛（ミカシキヤヒメ））を娶り、物部氏の祖となる宇摩志麻遅命（ウマシマジノミコト）をもうけたとされる。

神武は天孫ニニギの後継だから、それとは異なる天孫としてニギハヤヒは降臨し、ヤマト一帯を治めていたナガスネヒコが仕える神だった。つまり、正史に於ける天孫族がヤマトを治める以前に、ヤマトを治めていた一族の指導者だったわけである。正史に於ける天孫族は秦氏だから、それ以前に治められていたヤマトとは邪馬台国のことで、その指導者ならば、海部氏の暗示である。ナガスネヒコのナガスネが文字通り“長い脛”を意味するならば、環太平洋地域で特徴的な縄文系の体形であり、海部氏が縄文王家に入り婿して邪馬台国の礎を築いたことの暗示である。ミカシキヤヒメの“炊屋”は食に関わるが、食を司るのは豊受大神で、やはり海部氏の関わりを暗示している。また、十種神宝には息津（おきつ）鏡と辺津（へつ）鏡が含まれるが、まさしく、海部氏が代々手渡しで継承してきた御神宝である。

海部氏は縄文王家を殺して秦氏に王権委譲したわけではなく、前述のとおり、海部氏と婚姻関係にある出雲族での兄弟殺人がきっかけだった。出雲族は徐福系で、海部氏よりも後から渡来してきたが、『元初の最高神と大和朝廷の元始、海部穀定著、桜楓社、2006』に依れば、「ニギハヤヒは（海部氏の祖である）天村雲命よりやや遅れて渡来した」とあることから、ニギハヤヒには徐福系も重ねられる。そうすると、ニギハヤヒがナガスネヒコを殺して秦氏の神武に帰順した＝王権委譲したことは、出雲族でのこの事件も暗示しているのである。

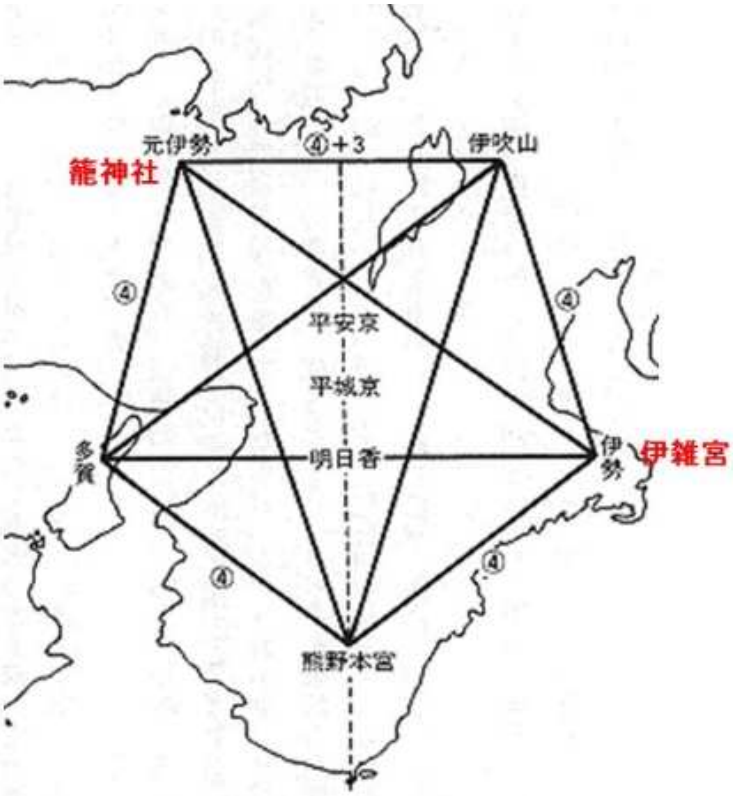
c：瀬織津姫

彦火明命の荒御魂ということだが、男神の荒御魂はカバラ的に女神とも言え、

彦火明命の妻はイチキシマヒメとされるから、カバラ的にはイチキシマヒメ＝瀬織津姫である。これは＜瀬織津姫と菊理姫－シリウス系と太陽系＞にも記載されている通りで、海部氏の大王が縄文王家の姫を娶って、和平を結んだことの暗示でもあり、彦火明命の天照大神的（太陽神的）性質に対して、その荒御魂たる瀬織津姫は、夜の太陽、太陽系の太陽に隠された太陽シリウスである。

そして、瀬織津姫の本質は、シリウス－太陽系の元となった恒星（大元の太陽）が黄金比フラクタル分割した残骸の白色矮星シリウスＢであり、Ｓ極系エーテル繊維がかなり強力に集中しているので、起源意識＝天御中主神との繋がりが強く、豊受大神的性質でもある。また、シリウス－太陽系の大元だから、シリウス－太陽系にとっての天御中主神とも言え、肉眼では見えないことからも天御中主神である。シリウス系と太陽系誕生後にはシリウス Ｂ として暗くなったがために＝隠れてしまったがために、大元の太陽としての性質は、夜空に最も明るく輝くシリウスＡの性質とされた。

前述のように、六芒星は星としては太陽を暗示しているが、数字の陰陽で言えば５が陽、６がそれに対応する陰の数字である。しかし、６を意味する六芒星が表に出ていて（六芒星は裏になっていても対称形だから表裏の判別がつかない)、５は隠されて（隠れて）いるので、本来表であるはずの５は、シンボルとしては逆さ五芒星となる。これが、近畿地方に見られる巨大な逆さ五芒星である。（＜星の信仰－太陽信仰の本質＞）



http://uumusou.yamanoha.com/monoomoi/qbl-index.html

しかしながら、本来シリウスは五芒星、太陽は六芒星である。籠神社が六芒星ならば、五芒星は海部一族と共に渡来した弥生海人で忌部氏（＝三木氏）の住まう阿波にある。天石門別八倉比売（あまのいわとわけやくらひめ）神社である。

奥の院とされる古墳は、天照大神の葬儀を伝える伝承から卑弥呼（海部氏の祖である日女命（ヒメノミコト））の墓とも言われ、海部氏との繋がりが伺える。天照大神の葬儀の解釈としては、亡くなることは“隠れる”とも言うことから、“隠れた太陽”ということで、つまり、シリウスである。

御祭神は大日霎（おおひるめ＝天照大神）とされるが、銅葺き屋根以前の大屋根棟瓦の時には、一対の龍の浮き彫りが鮮やかに踊り、水の女神との習合を示していたとされ、授与される御札には「火伏せ八倉比売神宮」と明記されていたとのこと。これは、水神＝エンキと習合された太陽女神・天照大神＝イナンナということであり、ならばシリウスの暗示（＜星の信仰－太陽信仰の本質＞）で、瀬織津姫ということ。つまり、太陽を通じたシリウス信仰である。

これを裏付けるか如く、奥の院とされる古墳にある祭壇は五角形で五芒星を形成し、少し離れた場所にある天乃眞名井と言われる井戸もまた、五角形の五芒星である。ここの眞名井と籠神社の眞名井（の石碑）で、五芒星と六芒星の対を成し、シリウスと太陽の対である。

八倉比売神社奥宮古墳祭壇

天乃眞名井

http://momijiaoi.blog.jp/archives/1047961497.html

阿波の忌部氏である三木氏は、大嘗祭に於いて麻の麁服（あらたえのみそ、荒妙（あらたえ））を調進する。それと対を成すのが、三河の赤引き糸で作られる絹の繪服（にぎたえのみそ、和妙（にぎたえ））だが、日本列島に於ける絹の発祥は、ちりめんで有名な丹後とも言われており（おそらく徐福が支那から持ってきた）、やはり海部氏との対となっている。

更に、三木家第 28 代当主の三木信夫氏は籠神社第 82 代宮司に祭祀を教え、三木氏の邸宅内で祭る神の御霊は邸宅の北東の部屋にあるという。北東はウシトラの方角だから、当然、この神はウシトラノコンジン＝豊受大神で、それを裏付けるかの如く、阿波という地名は豊穣神オオゲツヒメに因み、それは豊受大神に他ならない。そして、弥生海人大王家の血統の籠神社宮司に祭祀を教えたとなれば、阿波忌部氏である三木氏は弥生海人（＝邪馬台国）の祭司氏族で

ある。だからこそ、大嘗祭で秘儀とされる粟に繋がる地名の阿波忌部氏の栽培する麻で縫製された麁服が重要なのである。
　なお、大嘗祭では米と粟が御飯（おんいい）として奉られるが、本格的な稲作の発祥は丹後と言われ、粟は阿波に繋がるから、これもまた、海部氏と阿波忌部氏の対である。

　このようなシリウスと太陽の関係は、言うなれば豊受大神的な瀬織津姫と太陽神としての天照大神の関係だが、それを本質的に言うならば、根源神としての豊受大神と天照大神の関係である。それを暗示しているのが籠神社に伝わる御神宝で、彦火明命が授けられたと伝えられる、歴代の宮司が代々手渡しで継承してきた息津鏡と辺津鏡である。詳細は＜日本の真相 3＞＜日本の真相 4＞を参照頂きたいが、息津鏡は直径 175mm で後漢時代のもの、辺津鏡は直径 95mm で前漢時代のもので、息津鏡は栄えをもたらすもの、沖の方の海原の象徴、あるいはその海原に映る太陽の象徴であり、辺津鏡は栄えをもたらすもの、海岸周辺の海原の象徴、あるいはその海原に映る太陽の象徴とされている。これらは卑弥呼が神事で使い始めた鏡であって、八咫鏡のオリジナルでもある。

『元伊勢の秘宝と国宝海部氏系図　増補版』
（村田正志監修、海部光彦編著、元伊勢籠神社社務所、1996）

　息津・辺津と言えば宗像三神を祀る宗像大社の 2 つの宮だが、辺津宮（へつみや）ではイチキシマヒメが祀られる。これまで見たように、イチキシマヒメは瀬織津姫でもあり、その本質はシリウス B で豊受大神的性質だから、辺津鏡は豊受大神を暗示する。また、籠神社の秘伝には、イチキシマヒメの亦名が天照大神とあるので、これは“隠れた太陽＝シリウス”を暗示する。対するもう 1 つの太陽とされる息津鏡は辺津鏡よりも後の時代のものだから、シリウス B よりも後に誕生した太陽系の太陽であり、太陽としての天照大神の暗示である。
　しかし、それだけではない。宗像大社には中津宮もあるが、御神宝の鏡には“中津鏡”が無い。これは、辺津鏡が根源神としての豊受大神を、息津鏡が根源神としての天照大神を暗示し、二神で根源神の天御“中”主神を構成するためである。だからこそ、2 枚の大きさの異なる鏡で「合わせ鏡」とし、この宇宙が「合わせ鏡」のメビウスの帯構造であることまで暗示しているのである。

更に、息津鏡は瀛津鏡とも書くが、この“瀛”という字は、始皇帝と徐福の姓“嬴（えい)”にさんずいを付けたものである。始皇帝と徐福は海（＝水、さんずい）の向こうの常世の国に不老不死の妙薬を求めたから、それを“瀛”という文字で暗示した。そして、「合わせ鏡」の中の像は無限に続くような錯覚を引き起こすことから、一対の「合わせ鏡」は海部氏の神髄である“不老不死、永遠”をも暗示している。海部氏と徐福系物部氏の最高神はイナンナであり、イナンナは“不老不死、復活、永遠”の原型である。（後に、秦氏がこれに２枚のモーゼの十戒石板を重ねた。）そして、眞名井神社の鎮座する山は藤岡山だが、これは当然“不死の丘たる山”の意味である。亦名を天香語山とも言うが、これは“天籠山”でもあって、前述のように“籠”は宇宙の姿を具現化しているから、“永遠の宇宙”という意味でもある。

なお、イチキシマヒメの“イチキシマ”は“斎き島”に通じ、神に斎く島の女性＝巫女という意味で、海部氏の祖である卑弥呼やトヨそのものである。そして、厳島神社（広島県廿日市市）の祭神ともなっており、イツクシマという社名も“イチキシマ”が転じたものとされているが、背後にある弥山（みせん＝須弥山＝しゅみせん）が神体山で、須弥山とは古代インドの世界観の中で中心にそびえる山のことで、インド神話のメール山、スメール山だからシュメールのことである。

③酒

眞名井の項には、水や酒（メビウスの帯構造と同位相＝縮図である四面体構造を有する故に負のエネルギーを媒介できる物質）を入れるヒョウタン、とあったが、籠神社は酒にも深く関わる。

・丹後風土記逸文

丹波郡比冶里の比冶山の真奈井の井戸で天女８人が水浴をしていた。その時、老夫婦が１人の天女の羽衣を隠してしまった。天に帰れなくなったその天女は、その老夫婦の家に住む事になった。

天女は酒を造るのが上手く、その酒が高く売れ、老夫婦は金持ちになるが、十数年後には邪魔にされ家を追い出されてしまった。その後、転々とした後に、竹野郡船木郷奈具野村に鎮まった。この天女が豊受大神であると言われている。

・籠神社伝承

神代の昔、8 人の天女が眞名井神社の神域に舞い降り、粉河（こかわ）と呼ばれる川（眞名井神社横の眞名井川）で酒を造っていた。その時、塩土翁（シオツチノオキナ）が 1 人の天女の羽衣を隠してしまい、その天女は天に帰れなくなった。そのため、天女はしばらく翁と夫婦となり、この地で酒造りに精を出した。天女はいつも光を放ちながら空を飛び、その光景は、まるで鳥籠から光を放っているようだった。

与謝郡に豊受大神を祀る与謝宮が造られ、この天女が豊受大神をお祀りした。籠から光を放つことから与謝宮は籠宮（このみや）とも呼ばれた。この天女は

食べ物を天からたくさん降らせた。そして、この天女は与謝宮から神宮の所管社である御酒殿（みさかどの）の守護神・醸造神として勧請され、日本酒の始まりとなった。

丹後風土記逸文と籠神社伝承は異なる部分があるが、共通しているのは、羽衣を奪われて天に帰れなくなった天女が酒を醸すという点である。

風土記の悲しい逸話は、大和朝廷設立後の海部氏の待遇を暗示するが、8 人の天女はイナンナのシンボルである八芒星の暗示で、すなわち、最高神ヤー＝イナンナの暗示であり、真奈井の井戸とは言うまでもなく眞名井のことで、籠神社や眞名井神社は元々この地域にあったと推定される。（籠神社は 2019 年に現在の地への御鎮座 1300 年祭を迎える。）竹野郡船木郷奈具野村という地名由来の船木氏は元内宮とも言われる内宮・別宮の瀧原の地にも住まい、奈具野はイナンナが創造神のインダスに於ける蛇神ナーガを思わせる。

籠神社の伝承では、天女は食べ物を天からたくさん降らせたが、これはヘブライの民が 40 年間荒野をさまよっていた時、毎日、天から白いウエハースのような食べ物マナを降らせていたことを暗示させ、つまり、この場合の天女はヤハウェ＝ヤーであるが、数字 40 はエンキの王位継承数字であるため、イナンナとエンキの重なり＝シリウスである。そして、このマナも眞名井に通じる。

天女は風土記では豊受大神であり、籠神社伝承では豊受大神を祀ったことになっているが、“祀り主”が“祀られ主”に変わることはしばしば見られることからすると、やはり天女は最高神ヤー＝イナンナということである。

天女が酒造りに関わり、天女がマナを降らせたならば、白いウエハースのようなマナとは、今で言うところの塩麹だろう。単なる麹でないのは、塩が無ければ人は生きていけないためである。

さて、このように酒に関わりの深い籠神社、眞名井神社だが、古代に水や酒を入れていたヒョウタンは、前述のように宇宙のクラインの壺構造と眞名井の暗示である。水や酒（酒は水も含む）の酵母、酒の原料となる米に含まれるシリカは四面体構造を有し、メビウスの帯構造と同位相＝縮図である四面体構造を有するが故に、負のエネルギー＝S 極系エーテル繊維エネルギー＝龍のエネルギーを媒介できる物質である。そして、ヒョウタンから流れ出る水や酒は、クラインの壺＝眞名井から流れ出る S 極系エーテル繊維エネルギー＝龍のエネルギーである。

すなわち、ヒョウタン、（眞名井の）水、酒で S 極系エーテル繊維エネルギー＝龍のエネルギー＝豊受大神そのものを暗示する。

④水を遷すこと

しばしば天眞名井の水を遷した逸話が登場する。水は S 極系エーテル繊維エネルギーの良い媒介物なので、遷すことにより、その土地の水が活性化される可能性はある。

しかし、水が意味するものはそれだけではない。水は陰陽で言えば陰である。陰陽を神器の観点から見れば、陽は鏡、陰は玉と剣が相当する。日本とヘブラ

イの神器の対応は以下である。（＜日本の真相＞＜日本の真相 5＞）

・鏡：八咫鏡（日本）、モーゼの十戒石板（ヘブライ）。
・玉：八尺瓊勾玉（日本）、マナの壺（ヘブライ）。
・剣：草薙神剣（日本）、アロンの杖（ヘブライ）。

（八咫）鏡は太陽神の分身だから陽である。
（八尺瓊）勾玉は、原型がシュメールに於いて王権のある土地に埋めていた輝く玉だから、王権がある土地のシンボル（天に対する地）となり、陰である。
（草薙神）剣は勾玉と共に皇位継承の証で、天神から授けられた王権の印（鉄剣）だが、アロンの杖としては（天）神が降臨する依り代（族長の杖＊）だから陰である。

＊族長の杖（民数記 17:16～26）
イスラエル 12 支族の間で諍いが起きた時、主は各支族の族長の杖を契約の箱の前に置かせた。そして、主が選んだ杖には若葉が芽吹き、その族長に従わなければならない、と言われた。選ばれたのはレビ族のアロンの杖だった。このように、アロンの杖は主が自ら選ばれたからこそ、神が降臨するための依り代、神籬となり得るのであり、芽吹いたアロンの杖の姿は、神に捧げる木＝榊の原型で「生命の樹」である。

邪馬台国では剣を依り代とし、太陽神を祀っていた。そこで、ここでは神器の観点から考察する。
＜日本の真相 6＞に記載されているように、ヤマトの盆地に展開されている神社仏閣は、陽の御神体としての鏡、陰の御神体としての剣（と玉）によって見事に分けられる。それは益田岩船を起点とし、卑弥呼の邪馬台国の神山・都介野（つげの）岳と、トヨの大邪馬台国の神山・泊瀬山から太陽神を大和平野に導いて、豊穣を祈念するための構造である。そして、これは後の平城京の神山となる三笠山まで導かれている。
まず起点となっている岩船は、上部にある 2 つの穴に神籬（ひもろぎ）を立てて天神が降臨する依り代とし、天地陰陽の合一を表す祭祀施設である。

益田岩船

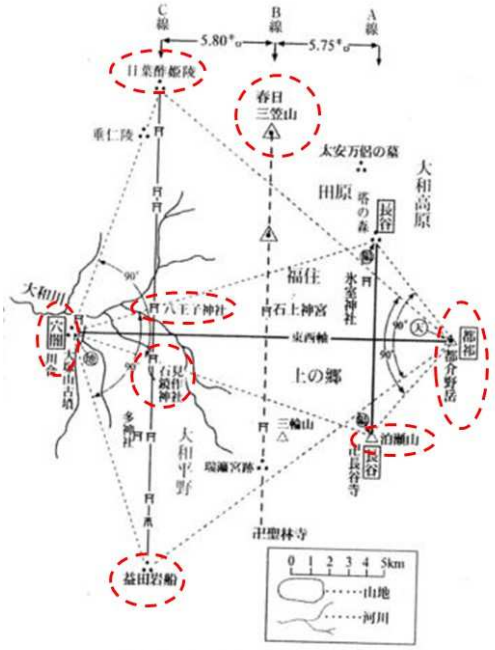


図20　大和の祭祀構造基本図形

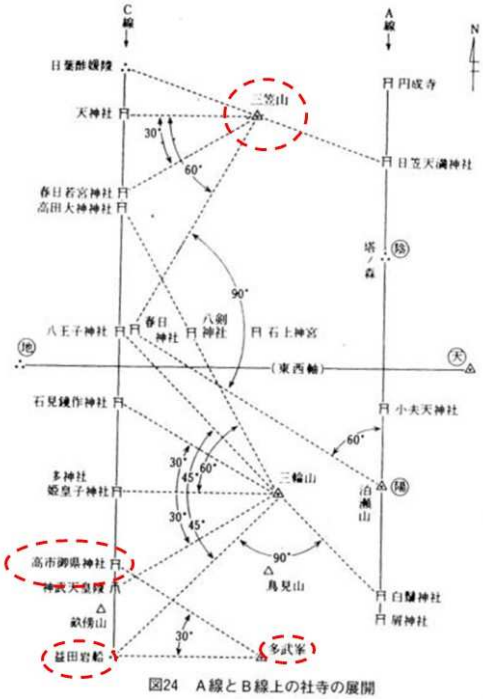


図24　A線とB線上の社寺の展開

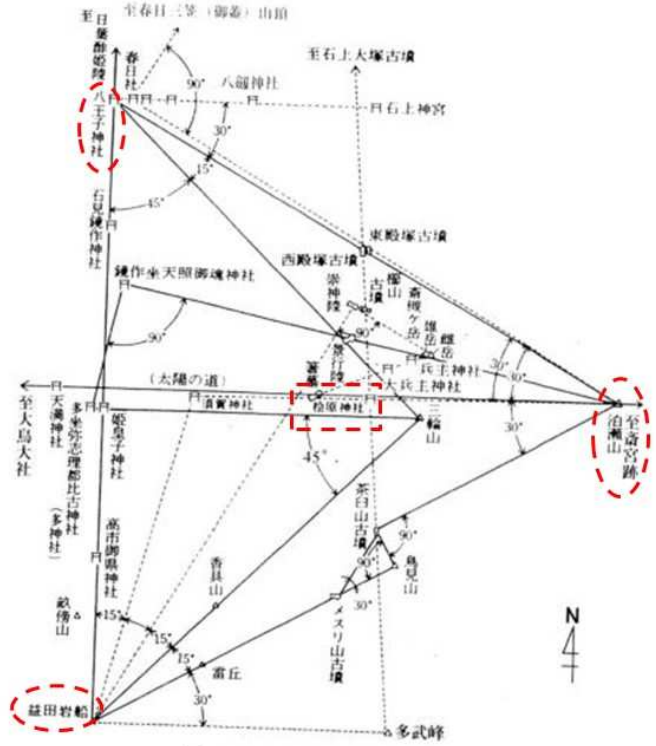


図16　泊瀬山と三輪山の祭祀構造

都介野岳は、本来は都祁野岳（ときのだけ）であり、“日の出の神山”という意味である。都祁を“つげ”と読むのは呉音読みとされ、漢音では“とき”と読む。“とき”は古代朝鮮語で“太陽の出現する盛んな様子や日の出”を意味し、これが日本語化して“鶏がときを告げる”とか“ときの勢い”“ときの声”などという言葉ができた。古代新羅（＝海部氏建国）からの渡来とされる延烏郎（ヨンオラン）と細烏女（セオニョ）、天之日矛などとの関連が伺われる。この都祁一帯は都祁国造が支配する都祁国があったが、彼らの居住した地域は小山戸（おやまと）と言い、奈良県で“ヤマト”を冠する数少ない場所である。この都祁から真西に行くと穴闇（なぐら）に到達する。穴闇は太陽が沈む方角だから、太陽が穴に入って闇となる、という地名になっている。

泊瀬山は古くから天照大神影向（ようごう、神仏が姿無く出現する意）の山として崇敬されていた。これを遥拝するのが大神神社の摂社で、最初に天照大神を宮中外で祀った倭笠縫邑と言われる桧原（ひばら＝日原）神社である。
都介野岳も泊瀬山も大和平野からは見えにくい場所にあり、このように奥まって顕に見えない場所を隠国（こもりく）と言い、神聖な神の世界だった。（だから、神社などでも御神体を見ることができない。）その神とは、いずれも太陽神であることは、明白である。

岩船を北に延長した端には日葉酢姫陵があるが、＜日本の真相 5＞に記載されているように、日葉酢姫は丹波道主王（タンバノミチヌシノミコト）の娘で、天照大神を最初に祀った卑弥呼が投影された海部氏の姫であり、太古の神祭りに於いて大変重要な役割を示唆している。記紀に於いても、前后の遺言により垂仁天皇の二番目の后となっている。その日葉酢姫陵と岩船の中間点の真東には都祁（つげ）村（現・奈良市都祁）の都介野（つげの）岳がある。
ここで、前述の図 20、24＊に於ける東西線を中心とすると、奈良盆地に広がる図形は見事、南北に分割される。

＊この記事に於ける図の通し番号ではなく、『ヤマト古代祭祀の謎』(小川光三、学生社、2008)に於ける図番号である。前ページの図も以下の図も同じく。

天照影向の泊瀬山には長谷（はせ）寺があるが、その対称点にはやはり長谷（ながたに）という地名があり、水神を祭る氷室神社がある。そうすると、都祁を中心に、南が太陽神＝陽、北が水神＝陰という陰陽の構造であることが解る。同様に、岩船－日葉酢姫陵ラインにある八王子神社は剣＝陰を、石見鏡作（いわみかがみつくり）神社は鏡＝陽を祀り、やはり南が陽で北が陰である。古墳の発掘では鏡や剣、玉が同時に出てくると思われがちだが、この付近の古墳では鏡が発掘される場所では剣や玉は発掘されず、逆に剣や玉が発掘される場所では鏡は発掘されない。これは、神器としての陰陽が明確に区別されていることを意味している。それを更に詳細に表しているのが次ページの図 21、22である。

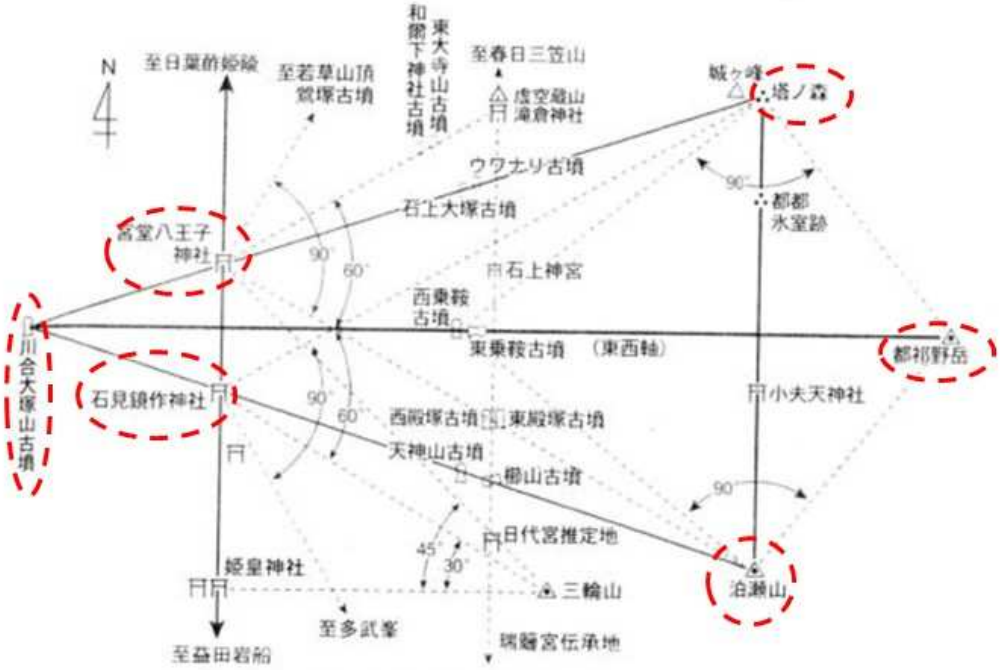


図21　大和の祭祀構造の中央部

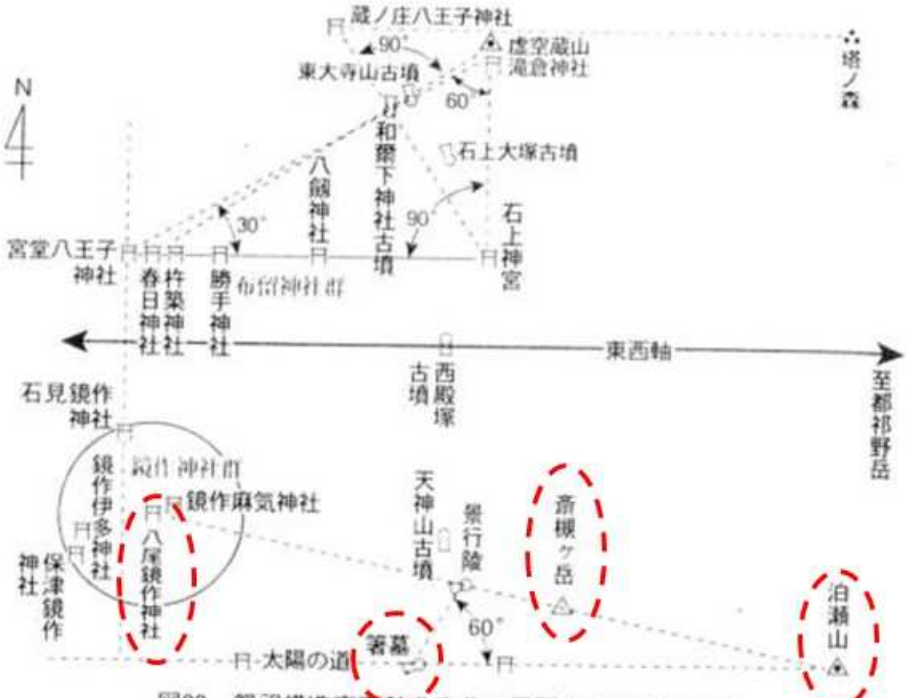


図22　祭祀構造東西軸の南北に展開する陰陽の展開

図 21、22 に於いて、北の長谷に繋がる八王子神社と南の長谷に繋がる石見鏡作神社に着目する。八王子神社から真東の石上神宮に掛けて剣と玉を祀る神社群が整列する。その北側の領域にある三笠山は三輪山と同様な円錐形の山であり、天を象徴する数字“三”を冠する天の山、すなわち、太陽信仰の山だが、三笠山は同時に月への信仰にも関わり、有名な阿倍仲麻呂の歌にも詠まれている。月は象徴として太陽の陽に対する陰だから、やはりこの領域は陰である。

また、石見鏡作神社付近を拡大すると鏡作神社が点在するが、その本社は八尾（やお）の鏡作坐天照御魂神社（かがみつくりにいますあまてるみたまじんじゃ）で、正一位という最高格であり、天照大神の神霊と伝えられている。そして、“八尾”を“鏡”に映せば“八頭”であり、八咫とは八頭のことであり、八岐大蛇の象徴である。八岐大蛇の尾から出てきたのは草薙神剣だから、八尾鏡作神社は草薙神剣を依り代として太陽神・天照大神（天照国照尊）を祀っていることの象徴でもある。

ここで、図 22 に於いて、箸墓の中心線が泊瀬山の方には向いておらず、斎槻岳（ゆづきがたけ）の方向を向いていることに注意されたい。次の図 52 では、斎槻岳から八王山（はっちょうさん）を経て都介野岳を向いていることが良く分かる。そして、斎槻岳は八尾鏡作神社－泊瀬山のラインと、箸墓－都介野岳のラインの交点である。つまり、泊瀬山と都介野岳の両方に関わっている。

図52　山中と平野の多御を結ぶ古墳の中心線と古道

斎槻岳は万葉集にも詠まれており、いずれも雲が掛かって恵みの雨を期待する歌である。

・穴師川　川波立ちぬ巻向の　斎槻岳に雲居立てるらし
・あしひきの　山川の瀬の響るなべに　斎槻岳に雲立ち渡る

八王山は“八大龍王（水神）の山”という意味だが、一説には、スサノオに

よって８つに切断された八岐大蛇の８つの身に８つの頭が取り付き、８つの小蛇となって天に昇って水雷神と化し、天村雲剣に従ってヤマトの国の布留川の川上にある日の谷に降臨し、八大竜王になったという。
（http://kamnavi.jp/log/yumv0110.htm 参照。）
　この天村雲剣＝天叢雲剣は後に草薙神剣と改名されるが、大蛇の上には常に雲が立ち込めていたことから天叢雲剣と名付けられた。この大蛇の姿は、古事記に依れば、体には苔や杉、檜などか生えており、その長さは８つの谷をわたり、８つの山を越えるほどとされるので、大きな山の喩えでもある。ならば、雲が掛かって恵みの雨を期待される斎槻岳もまた、八岐大蛇の比喩と言える。

　つまり、斎槻岳は雨をもたらす龍神＝八岐大蛇、八王山は水雷神と化した八岐大蛇を象徴し、いずれも天村雲剣＝天叢雲剣＝草薙神剣を暗示している。それが都祁野の手前にあることは、天照大神を祀るために草薙神剣を奉じたことを暗示しており、箸墓の中心線が指し示す方角は極めて重要である。つまり、箸墓の主、トヨが示している方角は、祖先の卑弥呼が神祭りした場所を暗示していることに他ならず、都祁野こそが、卑弥呼の邪馬台国の地である。
　そして、箸墓の真東には最初の元伊勢とされる桧原神社があり、ここは天照大神影向の山である泊瀬山を遥拝する場所である。
　換言すれば、卑弥呼の邪馬台国の祭祀を都介野岳－八王山－斎槻岳のラインでヤマト平野の位置に遷し、泊瀬山から真西に伸ばしたラインとの交点に箸墓を造ったとも言えるのである。その、祭祀をヤマト平野に遷す役割を担っているのが、天照大神を祀るために奉じた、神の依り代たる剣である。それを更に詳しく見てみよう。

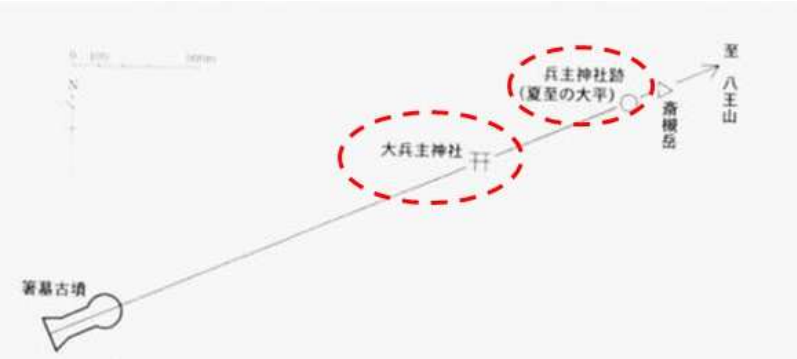


図35　箸墓古墳―兵主神社跡（夏至の大平）―斎槻岳の位置

　図 35 は都介野岳－八王山－斎槻岳－箸墓のライン上に夏至の大平とされる兵主（ひょうず）神社跡と大兵主神社があることを示している。兵主神社についての詳細は＜日本の真相 6＞をご覧いただくとして、ここでは概要を説明する。
　兵主神社（正式には穴師坐兵主神社（あなしにいますひょうずじんじゃ））は応仁の乱で焼失したので元兵主神社とも言うが、この神社は名神（めいじん）大社という最高の社格であった。現在は、かつての穴師下社だった大兵主神社に、摂社だった巻向坐若御魂神社と共に合祀されている。祀られるのは兵主の

神である。
　兵主の神は支那の史記に登場する蚩尤（シユウ）である。蚩尤は魔を払う半人半獣の守護神かつ戦いの神で、両鬢は逆立って剣の切っ先のように鋭く、頭の真ん中には角が生えており、砂と石、一説には鉄鉱石を食べていたという。ならば、蚩尤は製鉄を暗示している。鉄を制したものが武力を制したので、まさに兵の神、兵主神となる。そして、銅剣の時代を制したのは鉄剣で、“剣の切っ先のように鋭”いことは、まさしく鉄剣である。
　つまり、斎槻岳のみならず、兵主神社も天村雲剣＝天叢雲剣＝草薙神剣を暗示している。
　ちなみに、このラインと東西ライン（箸墓－桧原神社－泊瀬山ライン）の角度は約 22 度だが、このライン上から太陽が昇るのは夏至の約 1 ケ月前後で稲の播種の時期であり、故に、前述の“夏至の大平”と言われる所以でもある。そして、剣を奉じて太陽神を祀るから、兵主神社は元桧原神社とも言える。
　また、纏向遺跡を中心とした一帯は“出雲荘”という地名であり、出雲という地名の根源で、“元出雲”である。八岐大蛇は出雲に関わる逸話だから、ここでもやはり剣となり、高尾張氏が葛城氏と共に剣を奉じて天照大神を祀っていた。（高尾張氏は後に東海地方に移動して、草薙神剣を熱田神宮で祀る尾張氏となる。）

　他にも、旧暦 4 月 8 日に山頂の元兵主神社（穴師上社）から、斎槻岳の山麓にある大兵主神社（穴師下社）に神を迎える例祭がある。この日は、農家でテントバナ（天道花）という行事（お祭り）も行われていて、高低 2 本の竹竿の先に野草の花を付け、これを天に向かって庭先に立て、高い方は太陽に、低い方は月に奉げる祭りである。すなわち、陰陽一対の花を天に奉げるお祭りで、竹竿は天からの神を迎える依り代であり、神籬である。この日は稲播種を行うにあたり、天からの穀霊を迎える日であり、山から神を迎える日でもあった。これは天＝陽、山＝大地＝陰で、天地合一の陰陽合一であり、前述の岩船に神籬を立てるのと同義である。
　つまり、兵主神社の例祭とは、剣を暗示する神社に神が降臨することを意味し、それがこの地の農家でテントバナとしても受け継がれている。

　穀霊は言うなれば豊穣神・豊受大神だが、恵みをもたらす大元は太陽＝天照大神に相違ない。このような神々を大和平野に導く構造は、前述の図 20 に於いても明確である。それは、長谷－泊瀬山ラインを A 線、三笠山－聖林寺ラインを B 線、日葉酢姫陵－岩船ラインを C 線とすると、A 線は聖なる山の聖線、C 線は平地の俗なる地域のライン、B 線は両者の接点の山麓地帯という構造である。A 線より東側は隠国の太陽神を祀る地域で、天のラインである A 線には、十一面観音を祀る寺が集中している。十一面観音は「生命の樹」のセフィロトの数を意味しているので「生命の樹」そのものの暗示だが、「生命の樹」はイナンナが掛けられた木であり、イエスが掛けられた十字架である。つまり、十一面観音は神の依り代を象徴しており、それはまた、神の依り代であるアロンの杖の暗示でもある。すなわち、剣であり、剣でもって太陽神を祀り、導くことを意味

する。そして、C 線上にあってすべての起点である岩船は天地陰陽の合一を表すから、この巨大な祭祀構造は剣でもって太陽神をヤマト平野に導いて、豊穣を祈念するための構造なのである。

長くなってしまったが、陰である剣を奉じて陽である天神（主に太陽神）を祀る構造が、ヤマト平野の巨大な祭祀構造に反映されていることがご理解頂けたであろう。

そして、剣には水がまつわる逸話が残されており、共に陰陽で言えば陰である。つまり、水を遷す逸話は、神祀りのために依り代としての剣が移動したことも暗示しているのである。また、剣は大王としての証でもあるので、常に大王と共にある。それが鉄剣であり、皇居で陛下と共にある剣璽の剣として象徴されている。そして、祭祀用の剣の大元は、アロンの杖である。

(4)海部氏系図

籠神社で外せないのは国宝の海部氏系図だが、それは弥生時代の初代大王から秦氏の初代大王・応神天皇に至る邪馬台国の大王家系図に他ならない。詳細は＜日本の真相 5＞参照のこと。ここでは＜日本の真相 6＞＜縄文海人（あま）と弥生海人＞＜神の名を冠する天皇＞も併せて、重要点をまとめる。

①日本国の歴史の流れ

・大陸からはアジアの北方や南方、太平洋からは環太平洋地域から船で多くの民族が渡来。いずれの民族も、発祥の地は中東の古シュメール。

↓

・ノアの大洪水後、中南米からカ・インの子孫が渡来し、前期縄文王国を築く。王国の中心は当時の気候からして、東北から関東にかけての地域である。主神はニンギシュジッダ、イナンナ、ウツ、エンキ、他に金属関係ではニヌルタなども。

↓

・支那の四川を起源とし、エンキを最高神とする一団が渡来し、前期縄文王国に入り婿して和平を結び、後期縄文王国を築く。王国の中心は鹿島・香取、紀伊、宇佐～鹿児島の 3 箇所で、宗像三神として暗示されている。彼らは金（きん）を扱う。王国は緩やかな共和制。前期の中心的王家は諏訪へ。

↓

・シュメール王家の直系で、イナンナを最高神とし、鉄剣とアロンの杖を王権のシンボルとするエフライム族を大王家とするサマリアの十支族がフェニキアの大船団で渡来し、後期縄文王家に入り婿し、和平を結ぶ。最高神が異なるので、本来、和平は結びにくいが、縄文王家には無かった鉄を有していたので、日本列島に於ける新たな王家となり得た。しかし、中には不満に思っていた縄文勢力も存在した。

↓

・最初の上陸地点は九州だが、当時の表玄関だった丹後へ移動する。途中、四国の阿波には祭司レビ族の中核が残り、後の統一王国の時代に備える。

↓
・丹後では祭司である天香語山命が豊受大神を祀り、不老不死を神髄とする新たな祭祀が始まると同時に、天村雲命が弥生王国の初代大王となる。この国に於ける海部氏の始まりである。この大王が後に神武天皇とされる。鉄剣を王権のシンボルとして有していたことが、“武”として暗示されている。それは言うまでも無く、天村雲剣＝天叢雲剣＝草薙神剣である。草薙神剣は焼津の地で草を薙いだので草が絡まっているような状態を意味するが、それは後に芽吹いたとされるアロンの杖を暗示している。
↓
・しばらくして、海部氏と同じくイナンナを最高神とするペルシャ系十支族の流れを汲む秦帝国の一団が徐福に率いられて何度かにわたって渡来し、徐福系が海部氏に入り婿し、物部氏となる。そのトップは海部氏である。徐福らは絹や本格的な稲作を伝授する。徐福系は後に葛城氏（更に蘇我氏）となる。
↓
・列島の中心に統一国家を創る準備が始められ、丹後から南下する。また、朝鮮半島には鉄が豊富に存在したため、海部氏の一族の者が朝鮮半島に渡り、新羅を建国する。匏公（ココウ）と脱解王（ダッカイオウ）である。これにより、大陸への窓口となる朝鮮半島への海路は海部氏が取り仕切ることとなる。また、鉄と共に、国内では不老不死の妙薬とされた水銀朱も海部氏が取り仕切ることとなる。半島からは、天之日矛などが里帰り渡来する。また、後期縄文王家の一部は大陸に里帰りし、後の呉を築く。
↓
・紆余曲折を経て、ヤマトの都介野岳付近に最初の小連合国的な統一王国が築かれる。いわゆる邪馬台国（ヤマトのくに）で、海部氏の血を引く卑弥呼が女王となり、息津鏡・辺津鏡を神自身とする祭祀が始まる。しかし、敵対する縄文王家の一族もおり、紀伊の狗奴国（くなこく）が最後まで抵抗する。
↓
・卑弥呼が没すると国が乱れたが、主要豪族の協議によって卑弥呼の孫の世代に当たる海部氏系の 13 歳のトヨを女王として擁立することにより、ようやく列島としての統一国家が成立する。卑弥呼の邪馬台国を小邪馬台国と言うならば、これは大邪馬台国である。王国の場所も纒向に移動して、纒向からは元兵主神社（元桧原神社）を介して卑弥呼の邪馬台国の都介野岳を遥拝し、また、桧原神社やダンノダイラから巻向山越に、トヨの大邪馬台国の新たな神山として選ばれた泊瀬山を遥拝する。
↓
・トヨの夫には徐福系葛城氏のオトヨノミコトが選ばれ、この時代に政体と國體が分離する。阿波のレビ族が忌部氏として祭祀を教え、纒向で葛城氏と海部氏の兄弟分家である尾張氏が手を携え、草薙神剣を神の依り代として祭祀を行い（＝政体）、海部氏本体は丹後を拠点として大陸・半島等の交易を担うこととなる（＝國體）。ようやく統一王国としての新たな祭祀が始まったので、オトヨノミコトは後に崇神（神を尊ぶ）天皇と呼ばれるようになる。
↓

・大陸では、エジプトのアクエン・アテン一神教の影響を受けた二支族（原始キリスト教）に十支族が改宗・融合して秦氏となり、半島経由で次第に渡来するようになる。
↓
・海部氏系を快く思っていなかった縄文系が秦氏に協力するようになるが、ある時、御神宝をめぐって海部氏と婚姻関係にある出雲族で兄弟間の殺人が起きる。この事件と、秦氏の最高神イエス・キリストが降臨したことをきっかけに、最終的に海部氏から秦氏へと王権が委譲されることとなり、大和朝廷設立となる。
↓
・秦氏の大和朝廷初代大王はマフルこと応神天皇で、海部氏に入り婿し、和平の証として黄金のマナの壺を渡す。最大の屈辱を味わわされた海部氏の最後の大王タケフルクマは最も徳のある仁徳天皇として、世界最大の墳墓に祀られる。マフルは秦氏の神に応じたということで、応神と呼ばれるようになる。
↓
・大和朝廷の祭祀は邪馬台国のものをベースとするものの、表向きは原始キリスト教に変えられ、カバラを駆使して仏教とも習合し、真相は来るべき将来に向け、封印される。秦氏への王権委譲にあたり、物部氏は改宗して秦氏となる。ある一族は新たな大王家を裏から支える存在となり、またある一族は封印を護るべく陰に隠れたり、隠される。新たな大王（＝政体）を裏から支えている（＝國體）のは、原始キリスト教徒の中核と後期縄文王国の王家で、彼らは裏で主に金（きん）とケシを取り仕切り、海部氏は格を落とされたものの、鉄と水銀朱を取り仕切る。封印された側は、鬼や異形の者として喩えられる。彼らの神もまた封印され、ウシトラノコンジンはその典型である。ウシトラノコンジンは国常立神であり、真相は豊穣神で大地母神としての豊受大神で、封印された海部氏も暗示する。同時に、シリウスの真相も太陽の陰に隠される。
↓
・その後、後期縄文王家たる縄文海人は欧米に進出し、欧州王家にも入り込み、現在の世界金融の元となる制度を創り上げるが、現在も世界金融の元手は彼らの持っている金（きん）である。また、彼らは江戸時代末期に日本国内の国體勢力と連携して、外からの開国の役割を果たす。

②正史に於ける年代操作

記紀という正史制作にあたり、大陸へのアピールとして、海部氏の大王家系図を基に、年代を約 480 年遡らせるということが行われた。これは、西暦を 60 で割って 1 余る年（辛酉（しんゆう）の年）には天命が改まって王朝が交代する革命の年とされ、60 年を 1 元、21 元＝1260 年を 1 蔀（ぼう）とし、大革命が起こるという讖緯（しんい）思想を取り入れたものである。（480＝60×8 だが、8 は最高神ヤー＝イナンナの暗示である。）

これにより、正史に於ける年代は混乱することとなり、併せて、様々な伝承に於ける大王名も入れ替えが行われ、物部系の系図は大幅に改竄された。

今日では、大東亜戦争後の“教育成果”により、記紀は“征服者から見た歴史書”とも言われたりするが、そうではない。古事記は万葉仮名で国内向け、日本書紀は支那語で大陸向けに書かれているが、国内向けの古事記では、3 分の 1 ほどが国譲りの話に費やされている。これは、一歩間違えれば征服者の歴史観となってしまうが、その危険性を冒してまで記載されているのは、話し合いによる国譲りがほぼ史実に基づくものだからであり、この記述であれば、どの豪族も妥協できるギリギリの線だからに他ならない。単に征服者にとって都合の良い歴史としたいのであれば、それ以前の歴史など無かったことにして、都合の良い内容に書き換えれば良いのである。

しかし、大陸で成されるが如くのような、前王朝を全否定するようなやり方は取られなかった。それは、前王朝の祭祀を引き継ぎつつ、新たな祭祀形態を重ねているからである。（前述のヤマトに於ける祭祀構造など。）これは、縄文から弥生に変わった時も同様で、古代に於いては政祭一致であり、前王朝の祭祀を否定することは前王朝の人たちをすべて敵に回すことになるからである。

このように、祭祀を引継ぎつつ、新たな祭祀を重ねる「重ね合わせ」はカバラの重要な要素の 1 つであり、記紀も両者でカバラの「合わせ鏡」であり、神々の名や出来事など、両者揃って謎を解く鍵とされている。

(5)第 82 代宮司の総まとめとしての著書内容

以上は主にこれまでのまとめだが、ここでは第 82 代宮司が総まとめとして書かれた著書に記載されている重要な内容を紹介し、コメントする。（コメントは＊である。）以下がその著書である。

『元伊勢籠神社の略誌と神道哲学（海部光彦著、元伊勢籠神社、2017 年 8 月 8 日）』

“8 月 8 日”と言えば、かつて第 82 代宮司が平成 8 年（1996 年）8 月 8 日に宮司が読まれた歌がある。それは、眞名井神社の波せき地蔵の立て札に刻まれている。

二千五百年（ふたちいほ）　鎮まる神の神はかり
百（もも）の御生れの　時ぞ近づく　（平成 8 年 8 月 8 日）

“皇紀にして 2500 年以上が経過したが、御鎮座される神様の御計画通り、いよいよ大神が御降臨される時が近い。”

カバラに於いて“888”は救世主を意味し、救世主とは降臨される大神のことである。それは豊受大神の原型で最高神イナンナ、その双子で太陽神（天照大神）かつエルサレムの司令官であるウツ、ニビルの最高神アヌ、原始キリスト教にとっての最高神イエス、イエスの父で地球の主エンキである。（その他のアヌンナキも含めて。）

また、2016 年 8 月 8 日には、陛下が譲位宣言遊ばされた。それを受けて、という意味も込められているであろう。

・海の奥宮である冠島は常世島とも呼ばれ、彦火明命とイチキシマヒメを祀る。

＊イチキシマヒメは宗像三神で縄文海人を、彦火明命は海部氏の祖を暗示するから、海部氏の初代大王が縄文海人の姫を娶って和平を結んだことの暗示。
　また、海の奥宮には海底遺跡が発見されているが、それは沖縄や青森のと同様、ある時、一気に海底に沈んだ。ニビルが地球に接近し、イエスが磔刑に処せられ、天変地異が起きた時である。なお、海の奥宮には大本教の開祖、出口なお氏が籠っていたことがかつてテレビで放映された。(NHK「日本人は何を考えてきたのか」　第9回　大本教　民衆は何を求めたのか、2013年1月13日放映。)

・マナとは、メラネシア地域に土着の語で「打ち勝つ」「勢力ある」などの意味で、未開社会に於ける非人格的な神秘的・超自然的力を指し、人間・霊魂・動植物・無生物に籠もり、転移性と伝染性を特色とする。また、マナは如何なるものにも固着せず、ほとんどあらゆる物に伝えられる性質を有し、それ自体としては非人格的でありながら、常にそれを支配する人格と結びついていると言われる。

＊マナに通じる眞名井の水は、龍のエネルギー＝負の S 極系磁気エネルギーを媒介する。S極系磁気エネルギーはS極系エーテル繊維を通じてあらゆる物質を貫き、生命エネルギーの根源でもあり、これがここで言うところのマナである。

・根源の霊的遺伝子とされる三種の神器は申すまでもなく「八咫鏡・八坂瓊勾玉・天叢雲剣」であります。一方、イスラエルのそれは「モーゼの十戒、マナの壺・アロンの杖」の三種と言われます。この内、マナの壺に入っているマナは、当神社の奥宮・眞名井原に古代に湧いていた天の眞名井の水の訓とたまたま同音であり、また飲料として、食物としての或る種の共通性があるかもしれません。当神社にも熱心な好古者がたくさん押し寄せ、眞名井とマナとの発音の関連性についてずいぶん質問されましたが、所詮偶然の一致（偶然の一致には点々）と答える外はありませんでした。

＊同じです、とはさすがに言えないだろう。が、わざわざこのようなことを話題とされ、完全否定されていないこと自体、重要であることを物語っている。

・月神は夜の世界を支配するとともに、『丹後国一宮深秘』では水の根源をも司ると書かれています。

＊月は陰、水も陰。万物を貫くのは負の性質の、つまり、陰の S 極系磁気エネルギー。

・彦火明命の三代目に当たる天叢雲命は、地上から高天原に参い上がり、天神の使われる御神水を琥珀の鉢に戴いて地上に降り、それを奥宮・眞名井原に湧

く泉に和（やわ）したのが天眞名井の水で、古来、一に天地根源眞名井の水と呼ばれました。この琥珀の鉢とは、実は純金の鉢を意味し、古来太陽の霊体を表すのに黄金が用いられた、いわゆる太陽金の古代思想に依るものです。

＊マナの壺も黄金の壺とされ、飛鳥昭雄説に依れば、代々の宮司継承者はこの壺を少し削って飲んだという。黄金はニビルでは稀で、地球には豊富に存在する、ニビルの大気を救う元素である。エジプトでは黄金は神の体とされた。

・彦火明命の彦とは日子の意で、日神を親と仰いだ美称です。火明は火の本源と信じた太陽を指すと同時に、その恵みを受けて地上ですくすくと成熟する稲の穂赤（あからみ）をも表す、大和言葉独特の言霊であります。

＊陽の性質である天の火（＝太陽）に対する、陰の性質である地の火である。また、陽の天神＝日神に対する陰の地上の神である。

・海人族の信仰は、来る朝ごとに東の水平線を朱（あけ）に染めて射しそめる暁の光、これを海照（アマテル、アマテラス）と読んだのではないかと思います。そうして時間と共に日は中天に昇って行き、天に在す太陽神という信仰が天照の表現を成立させたかと思われます。

＊天照の語源は海照（アマテル）。出雲の大国主神の前に海を照らして来た神は大物主神だが、これもまた海照。

・宇宙の本体がたとえ一つのものであっても、働きは陰陽、水火、天地、男女、マイナス・プラスというように、相いざないながら永遠に展開していきます。これは哲学的には一元多変・二元融合と言えるかもしれません。籠神社の古代祭祀に於ける天照大神と豊受大神の関係を二神一座・一神二座とその創祀から海部宮司家に秘伝されている本質の意味を、今改めて熟考したいと思います。

＊起源意識＝天御中主神の光（＝陽）の側面が天照大神、負（＝陰）のエネルギーの側面が豊受大神。つまり、天照大神とは太陽のみならず、大元の光も意味する。二神で天御中主神を形成することから、二神一座・一神二座。

・日の丸の白地こそは、宇宙や大地を表している大事な要素なのです。道教の哲理でも“先づ陰ありて、初めて陽を生ず”と言われています。真ん中の赤い丸は天照大神を象徴することはもちろんですが、白地は豊受大神を表象した、日の丸の赤と同様に大事な陰のシンボルです。

＊豊受大神は負のエネルギーなので陰。（正のエネルギーは物質宇宙。）起源意識は負のエネルギーそのものであり、そのエネルギーの一形態として光がある。光が本質ではなく、光は熱や音などのようにエネルギーの一形態にすぎない。

・宮司家の血脈始祖にイチキシマヒメがつながるのは、籠神社のみであります。

＊縄文王家の姫を娶った正式な弥生王家は海部氏のみということ。

・籠神社の「籠」は、竹で編んだ籠船を表し、御祭神がシオツチノオジの編んだ籠船に乗り、海神の宮に遊幸されたとの故事に因んでいます。籠船の意味する思想内容とは、海原、海神、水軍、水気、月神、常世、渡来民、新文化などの多岐にわたります。日本の最古代－縄文、弥生、古墳の各時代に、グローバルな文化融合の一大実験ドラマが、さりげなく、言挙げせず、宇宙意思であるかのように粛々と行われたと思います。私はこのような壮大な実験を与えられた古代日本の性質を、「多次元同時存在」という、私独自の術語で表しています。

＊(4)①のような渡来の歴史があったことを肯定されている。

・豊受大神はウカノミタマとも呼ばれるケの大神で、稲の生育こそが古代人にとって最大関心事であり、万物－とりわけても日本人の主食の用を弁じた植物としての稲の生育繁茂する姿に、生成（いな）りの力の元としてケの神の恩徳を直感し、これを即物的に稲生（な）りと表現するようになったと思われます。このように豊受大神の信仰は、元の名前から変化して稲荷大神という俗信仰に転生して、日本の津々浦々に広まっていきました。

＊稲荷神は元々山から平地に降りてくるとされる穀霊。稲魂。

・豊受大神と旧事本紀（くじほんぎ）での最高神は、自然神としての本質神格に於いては一致するのが当社の秘伝であります。（旧事本紀の最高神は天壌日天狭霧国禅月国狭霧尊。つまり、霧で、水気根源という性質のこと。）

＊旧事本紀は物部系の伝承。天、日が天照大神、霧（＝水）、月が豊受大神を意味し、つまりは天御中主神と同義。

・縄文時代末期にも、世界文明の発祥とされるシュメールやユダヤからも数波にわたって入っているのではないかとの論がかまびすしくなりました。

＊史実だからこそ、わざわざこのようなことに言及されている。

・（民主主義には）個を中心とした考えが根底にあり、往々にして自我実現に働く嫌いがあるので、その点、これを匡（ただ）す高次の叡智が必要となります。

＊(2)③d：自己と自我（エゴ）で示した通り。

・中今は、三次元世界でいう過去、現在、未来の分割された物理的時間を凝縮昇華させ、時々刻々に生きるいのちの実在を、永遠との接点として自覚する言

霊である。したがって宇宙と自己との融合は、中今を以て起点とし、終点とする。すなわち中今は、現代のある固定的時間の一点を指すのではなく、宇宙の創造的進化（修理固成）の舞台に於いて使命を負った人間が、目標に向かって命を燃やし輝かせる、持続的態度を表すものである。

＊まさしく宇宙の原理そのもの。

・人は中今の悟りによって、宇宙ショーの観客である自己を自らの中に写し絵として切り取り、その舞台で演技者として登場することができるのです。（中今は宇宙の創造的進化の一瞬一瞬に参入する、精神的座標軸であります。）

＊人にはそれぞれ役割があるということ。それこそが、自己と他人との違いであって、それを偉いだとか、劣っているだとかという自我中心の世界観と勘違いしてはならない。

・「もったいない」と同じような言葉に「おかげさま」がありますが、両語共に主語はなく、うるわしい大自然の幸に恵まれた日本人が、天地萬物への感謝をさりげなく表した謙譲語です。

＊主語が無いことの重要性については、(2)③e：エゴの解消で示した通り。

・「みあれ」とは、父なる太陽の御蔭（祝福）を、母なる水霊の妙なる生みの力で現世（うつしよ）に体現し、生命を永遠に更始一新しつつ進化向上していく秘儀を表したものです。
　人生や世界が一瞬の小（お）やみもなく変化する中に、不如意なことやきびしい事態等のさまざまな試練に遭遇しながらも、因業（いんごう）の連鎖や既成概念の自縛に囚われず、これを真理に照らして見直し、聞き直し、宜（の）り直し（＝本来あるべき、神の大愛のこもった妙なる言霊として発し直し）て、日々元旦の気持ちで創造的に進むべきことを、この哲理は教えてくれるのであります。

＊父なる太陽の御蔭は起源意識の光の側面、母なる水霊の妙なる生みの力は起源意識の（負の）エネルギーの側面で、生みの力は負のエネルギー＝S 極系磁気エネルギーであり、宇宙はエントロピー減少の進化系で、進化が義務付けられている。起源意識は人間型生命体を通じて経験し、進化するので、因業の連鎖や既成概念の自縛に囚われない、すなわち、マイナスの感情に囚われないことが重要である。

・人類史から見ると、次の新時代は火のエネルギーから水のエネルギーに代わりつつあると思う。

＊しばしば水瓶座の時代と言われる。目に見える“火＝日”のエネルギーから、

見えないエネルギー＝負のエネルギーを伝達する水を利用する時代へ。

・海部宮司家の秘儀とは、天の眞名井の水によるものである。

＊天の眞名井の水をもって、天御中主神＝起源意識のエネルギーを取り入れることなのだろう。

・500 年毎に己の身を焼いてその灰の中から再び若鳥となって甦るエジプト神話のフェニックス（不死鳥）のように、日本民族のみあれの遺伝子を今こそ覚醒させ、行詰まった世紀初めの大難局を、勇敢に切り開きたいと念じます。

＊フェニックスの原型は、“復活”のイナンナである。火葬の大元はフェニキアとも言われているが、フェニキアの最高神は海部氏の最高神と同じくイナンナであり、フェニックスはエジプトとフェニキアの間を行き来する。＜日本の真相 6＞
　英語のフェニックスに相当するギリシャ語のフォイーニックスは、フェニキア、紫、ナツメヤシの 3 つの意味を持つ。紫はフェニキア特産の貝紫から抽出される赤紫の色素で、フェニキア人はこの貴重な色素で財を築いた。紫が最も高貴な色とされるのは、日本も同じである。ナツメヤシはイナンナの好物であり、中東では「生命の樹」とも言われる。＜神々の真相 4＞

・霊界通信　人類の使命　審神者（さにわ）　林兼明
　以下の詩編は終戦後の昭和 20 年代に行われた降霊界で、特に神から指名された神道系の審神者によってもたらされたものを、第 82 代籠神社宮司の実父、林兼明氏がまとめたものです。（実父は宇佐神宮の社家で、息子の光彦氏が縁あって海部氏に入り婿され、第 82 代籠神社宮司となられた。）

①天に日月地に山河　万有すべて具（そな）わるも　渾円球（＝地球）に人無くば　天地も何の意義あらん　ああ造化（かみわざ）の巧みさよ　人をはぐくみ地をゆだね　身体は人の子なれども　その魂は神に享（う）く　この現世（うつしよ）と隠り世を　結ぶは永遠（とは）のいのちなり　宇宙に産霊（むすび）あることを　神を求めてわれ知りぬ。

②人に歴史のありてより　神と人とは交わりて　久遠（くおん）の仏を説くもあり　天なる父というもあり　神のみ名こそ異なれど　親は一つにましまして　世界人類すべてみな　兄弟なりと諭されき　国と国との戦ひも人と人との争ひも　この理（ことわり）を知らずして　神にそむける罪と知れ。

③み親の恵む幸の子に　死といふ文字は無きぞかし　死とは命（みこと）を持ちながら　罪と手柄をみな負ひて　その故郷（ふるさと）に帰るなり　この世にありて来世（あのよ）なる　群生（とも）と語るも可能にて　因果の理法（のり）はのがれねど　我らは総て生き通し　神となるべき資格あり　生死（しょ

うじ）を超えて我も亦　神のみ国の一（ひと）柱。

④いのちの元の太陽を　廻るあまたの星屑の　一つを仮の宿として　地上うごめく我なれど　われあやしまず大宇宙　この身も奇（くす）しき小宇宙　人の幸こそ限りなき　我を見守る霊たちよ　神に近づけ給へかし　未完成より完成へ　向上一路たどり行く　永遠（とは）の旅路に栄えあれ。

祈　日本新生・世界平和　平成 17 年 9 月 9 日重陽

＊地球は人が存在してこその地球である。そして、宇宙の分霊（わけみたま）たる人の霊魂は現世（物質宇宙）と隠り世（起源意識）を結ぶ永遠のものである。宇宙の産霊とは、このようなことである。

万物を生み出した根源神とはすなわち起源意識のみであり、人はその分霊であるから、人類はみな兄弟である。それを知らずして、エゴによって争いごとなどすることは、宇宙進化の原理に背くことである。

死とは、各自の役割を終えて起源意識のもとに還り、人生経験を起源意識にフィードバックすることである。それにより、起源意識が進化する。人にはそれぞれ因果応報があるが、それを乗り越えて（＝カルマを解消して）生涯を全うすることが、神の分霊たる人の役割である。

地球は仮の宿に過ぎず、體は類稀なる大宇宙の分身である。人が幸せになることこそ限りないものであり、それにより宇宙も進化する。人生とは、限りない向上進化の旅路、創造主と一体となる永遠の旅路である。

(6)代替わり

平成の陛下御譲位前の 2018 年に、籠神社宮司が第 82 代から第 83 代へと代替わりした。海部家は現皇室に先んずる邪馬台国大王家の血統だから、現皇室に先んじて代替わりしたことはそれなりに意味がある。

第 82 代は縄文王家に所縁の深い宇佐神宮の社家からの入り婿で、海部氏に入り婿した第 10 代・崇神天皇（徐福系）の時代を暗示しているかの如くである。崇神の時代、13 歳の女王トヨとなってようやくヤマトの国として統一され、現在の神道に繋がる新たな祭祀が始まった。第 82 代は先代と共に、様々な極秘伝を公開された。第 82 代と長女の関係は、トヨを補佐する神官の父の姿を彷彿とさせる。そして、宮司としての錦を飾ったのは、長らく懸案だった眞名井神社の御修繕が突如として相成ったという奇跡であり、無事、正遷座が 2018 年 10 月 14 日に斎行され、第 82 代は宮司としての最後の御奉仕をされた。

そして第 83 代は、姉と共に祭祀を司る。姉と弟、これは巫女としての姉と補佐する弟という卑弥呼の邪馬台国の体制である。

皇室に先んずる王家の末裔と、皇室の同時的とも言える代替わり。そして、籠神社は新帝御即位の年（2019 年）に御鎮座 1300 年祭となる。様々な面で、世界が大きく動いていくだろう。